

令和5年度大学教育再生戦略推進費
「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」の申請について

| | |
|------------------|--|
| 代表校名 (連携大学名) | 東京医科歯科大学 (慶應義塾大学、国際医療福祉大学、順天堂大学、東海大学、東京歯科大学、東京薬科大学)計7大学 |
| 事業名 (全角20字以内) | 次世代がん医療を担う多職種人材養成プラン |

事業の構想等

【様式1】

1. 全体計画 ※事業の全体像を示した資料(ポンチ絵A4横1枚)を末尾に添付すること。

(1) 事業の構想

①事業の概要

本事業では①現場で顕在化している課題、②予防の推進、③新たな治療法の開発というがん医療のテーマを解決するため「専門的な多職種人材」を養成する。本事業の特色は首都圏の7大学においてチーム医療が実践できる多職種のがん専門医療人の養成プランを開発し、がんの予防、診断・治療、個別化医療、痛みのケア、サバイバーのケアなど全てのステージにおいて集学的治療が提供できる体制を我が国に構築することを目指す点にある。主要ながん種に加え、造血管腫瘍、小児がん、口腔がん、新規治療法開発なども対象とし、取り残される患者ゼロを目指す。本事業では歯学・薬学領域を含む独自の14のWorking group(WG)を設置し、各校の強みを集結した共通コースによる教育を行うのも特色の1つである。これにより広く受講者を募り、多くの専門的人材を輩出し、地域中核病院等への配置が可能となり、がん医療の均てん化と質の向上に貢献できる。

②テーマごとの課題と対応策

テーマ①：がん医療の現場で顕在化している課題に対応する人材養成

課題・対応策

「誰一人取り残さないがん対策の推進」を実践していくためには、患者のニーズにあったきめ細やかな対応が求められる。しかし①患者の苦痛を理解し寄り添う痛みの治療・ケア、終末期医療を担う専門家、②放射線治療、病理診断、がん薬物療法、造血管腫瘍、小児・稀少がん、口腔がん、がん口腔支持療法などを担う様々な職能を有する医療専門人、③高齢者や心・腎機能に併存疾患を有するがん患者への安全な医療の提供を可能とする学際領域の医療専門人が現場では必要とされているが、その数は不足している。本事業では参加校の連携を強化し、人材不足が顕在化しているこれらの専門家を養成して、本課題の解決を目指す。

テーマに関する強み

本事業では講義および各校附属病院の臨床現場にて、がん性疼痛を緩和するための各種アプローチ（神経ブロック、緩和的放射線治療、緩和的外科治療など）、放射線治療、がん薬物療法、細胞療法を含めた造血管腫瘍、口腔がん、がん学際領域等を学ぶ。各校がもつ強み・特性を集約した連携共通コースを受講することで、全受講者が同じコンテンツで、その領域の専門家による基礎から最先端の知識と技術指導を受けられるという強みがある。病理医養成ではデジタルアーカイブ化された教材の活用、分子病理診断システム・AIによる病理診断の習得が可能な環境を整えて指導を行うことも強みである。歯学部を有する大学が中心となり、がん口腔支持療法の基礎から多職種連携までを習得することもできるのも特色の1つである。これらの参加校連携のプラットフォームは将来の共同研究に活用することを想定しており、診療・教育・研究が可能な発展的な体制の構築を目指している。

テーマ②：がん予防の推進を行う人材養成

課題・対応策

がんは我が国の死因の第一位の疾患であり、効率的な予防医療の確立は重要な医学的課題である。医療ビッグデータを利用したAI技術の進展により、高精度の診断および予後予測法が開発されてきている。このような高精度の識別能・予測能をがん予防に展開させていくためには、医学や医療の視点からAIの原理を理解するがん専門医療人の養成が必要である。一方、このような予防医療の開発とともに、遺伝情報を患者とその家族に伝達する遺伝医療専門職の養成も同時に行うことが喫緊の課題である。さらに治癒率・生存率の向上が得られている中で、がんサバイバー・家族へのケアが大きな課題となっている。個別性のある医療・ケアの提供は極めて難しく、必要となる基礎的な知識と技能をがん診療に携わる多職種が習得することで、遺伝性腫瘍患者やがんサバイバーに対する誰一人取り残さない全人的なケアが可能となる。

テーマに関する強み

本事業では「医療ビッグデータに基づくがんの予後予測と予防」コースにて、①データプラットフォーム技術（多施設の連携に不可欠な連合学習）、②予測の医学（機械学習、深層学習など）、③医療生成AI（予後予測に基づく治療方針の基盤モデル）を学び、AI技術に習熟した医療人を養成する。このようにがん予防に関連するメディカルデータサイエンスを網羅しているのが本コースの強みである。「がん予防を推進する遺伝医療」、「がんサバイバーを支える多職種医療」の2コースでは、がん患者への対応に精通した遺伝医療専門職やその他の多職種による指導体制で、基礎から最新の知識と実践的な技能を習得することができる。またその中で多職種連携についても学び、チーム医療が実践できる能力を習得することを目指す強みがある。

テーマ③：新たな治療法を開発できる人材の養成

課題・対応策

腫瘍分子生物学の知見の蓄積により、個別化医療の礎となるがん遺伝子パネル検査や、CAR-T療法などの新規治療法が実臨床に導入されつつある。しかし、これら新規技術により恩恵を受ける患者は一部にとどまっており、依然としてがんは日本人の死因の1位を占める。がん克服のブレイクスルーを達成するには**全ゲノム解析**時代を迎え、個別化医療に精通し、基礎および臨床試験を通じて**新薬や新規技術の開発**と管理を担える人材が必要である。この課題を解決するため、がん治療薬の基本的知識、臨床研究の立案・計画、実施調整、関連する法規制について学び、これらの知識に基づいて**創薬ないしレギュラトリーサイエンス**を駆使して個々の患者の治療戦略も構築できる人材を養成する。また、医療統計学、**ビッグデータやAIを用いたインシリコ創薬、遺伝子療法、細胞療法、がんゲノム医療**など最先端の医療技術開発など創薬研究に関する幅広い知識を持った人材も養成する。

テーマに関する強み

本事業の「**個別化医療人養成**」コースでは個別化医療の初学者が、基礎から最先端の応用まで一貫通貫で学ぶ事ができ、また**多職種連携**も学ぶ事ができる強みがある。**新規治療法の開発・創薬研究**に関するコースでは各校の専門家による講義・実習を多職種の受講者に提供することで、それぞれの立場でがん創薬や治療へ寄与できる人材の養成が可能となる点が最大の強みである。特に**多職種連携・チーム医療の実践力**の習得するためにグループディスカッションやグループワークを取り入れ、施設間の垣根を超えた開発やミッション達成を目標とする。CAR-T療法や免疫チェックポイント阻害薬といった**がん免疫療法を担う薬剤師**を養成するコースでは薬学部教員、大学病院勤務薬剤師、がん薬物療法専門医・造血器腫瘍専門医から構成される講師陣による基礎から臨床までの講義・実習により高いレベルの実践力を習得可能となる。特に連携校にはCAR-T療法を含めたがん免疫療法を扱う基礎および臨床の講座が複数あり、最先端の技術や研究開発まで学ぶことができる強みがある。

(2) 達成目標・評価指標

| アウトプット | | | | | | | |
|---|----|------|-----|-----|-----|-------------|--------|
| 1) 教育プログラム・コースの立ち上げ時期：全てプログラム・コースは令和5年度内に準備し、令和6年4月に開講する。なお一部のインテンシブコースは令和5年9月に開講する。 | | | | | | | |
| 2) 教育プログラム・コースの実施数：正規課程29、インテンシブコース26。 | | | | | | | |
| 3) 教育プログラム・コースの履修者数： | | | | | | | |
| a) 正規課程： | 医師 | 歯科医師 | 看護師 | 薬剤師 | その他 | 多職種* | |
| R5年度 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| R6年度 | 18 | 8 | 7 | 5 | 2 | 34 | |
| R7年度 | 16 | 8 | 8 | 5 | 2 | 35 | |
| R8年度 | 18 | 8 | 8 | 5 | 3 | 35 | |
| R9年度 | 16 | 8 | 8 | 5 | 3 | 35 | |
| R10年度 | 18 | 8 | 8 | 5 | 3 | 35 | 計377人 |
| b) インテンシブコース： | 医師 | 歯科医師 | 看護師 | 薬剤師 | その他 | 多職種* | |
| R5年度 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 49 | |
| R6年度 | 3 | 0 | 0 | 20 | 0 | 239 | |
| R7年度 | 18 | 0 | 0 | 20 | 0 | 249 | |
| R8年度 | 18 | 0 | 0 | 20 | 0 | 249 | |
| R9年度 | 18 | 0 | 0 | 20 | 0 | 249 | |
| R10年度 | 18 | 0 | 0 | 20 | 0 | 249 | 計1481人 |
| *多職種：医師、歯科医師、看護師など複数の職種を対象としたコースの人数 | | | | | | | |
| ・両コース共に受講者の90%前後が修了見込みである | | | | | | | |
| 4) 本事業に係るシンポジウムやセミナー等の実施数 | | | | | | | |
| 【R5年度】 | | | | | | | |
| シンポジウム1回（参加人数：200-300人、参加校数：7） | | | | | | | |
| セミナー・ワークショップ8回（参加人数：20-100人、参加校数：原則7校、ただしテーマにより2～7校、連携校以外の参加により8校以上） | | | | | | | |
| 【R6～10年度】 | | | | | | | |
| シンポジウム2回（200-300人、7校） | | | | | | | |
| セミナー・ワークショップ15回（参加人数：20-100人、参加校数：原則7校、ただしテーマにより2～7校、連携校以外の参加により8校以上） | | | | | | | |
| アウトカム | | | | | | | |
| 1) 以下の専門資格取得数 | | | | | | | |
| 【医師】 ・がん薬物療法（腫瘍内科）専門医 ・血液内科専門医 ・造血細胞移植認定医 ・小児血液・がん専門医 ・小児がん認定外科医 ・小児外科専門医 ・骨軟部腫瘍認定医 ・放射線治療専門医 ・病理専門医 ・日本緩和医療学会認定医・専門医 ・臨床遺伝専門医 ・遺伝性腫瘍専門医 | | | | | | | |
| ・指定のコースを修了した循環器専門医、腎臓専門医、リハビリテーション科専門医 | | | | | | | |
| 【歯科医師】 ・口腔外科認定医・専門医 ・口腔がん専門医 ・がん治療認定医 ・補綴認定医・専門医 ・顎顔面補綴認定医 ・摂食機能療法専門医 | | | | | | | |
| 【看護師】 ・がん看護専門看護師 ・遺伝看護専門看護師 ・認定看護師（緩和ケア、がん性疼痛看護、がん化学療法看護、がん放射線療法看護など） | | | | | | | |
| 【薬剤師】 ・がん専門薬剤師 ・がん薬物療法認定薬剤師 ・外来がん治療認定薬剤師 ・がん指導薬剤師 ・緩和薬物療法認定薬剤師 | | | | | | | |
| 【臨床放射線技師・医学物理士】 ・放射線治療専門放射線技師 ・認定医学物理士 | | | | | | | |
| 【管理栄養士・他】 ・がん専門療法士 ・がん病態栄養専門管理栄養士 ・摂食嚥下リハビリテーション認定士 ・口腔ケア認定士 | | | | | | | |
| 【その他】 ・臨床倫理認定士 ・認定遺伝カウンセラー ・がん相談員 | | | | | | | |
| 2) 個別化医療の実施件数 | | | | | | | |
| 3) 地域の中核病院やがん拠点病院への上記の専門医療人の派遣・配置人数 | | | | | | | |

(3) 事業の運営体制

①学内の運営体制

大学院医歯学総合研究科副研究科長・医学部長が事業統括者、担当理事が事業統括補佐、血液内科・臨床腫瘍学分野教授が事業推進プロジェクトリーダー・事業推進委員会委員長となり、責任をもって事業全体を監督し、運営する。**領域・テーマ毎の教育プログラム開発担当者**が実習コーディネーター担当者と共にプログラムの開発と運営を行う。本事業では**多職種連携**を重要なテーマとしており、専門資格を有する医師、歯科医師、看護師、薬剤師、診療放射線技師、管理栄養士などが実働メンバーとなり、運営にあたる。これまで本学は**がん患者団体**と密に連携してきた実績があり、本事業でも密に連携して公開講座を開催などするため、**患者団体担当者**を配置する。本事業では広報・普及を重要な課題としており、**広報担当者**も配置する。本事業の責任委員会である事業推進委員会において事業全体および個別の課題を共有・議論し、運営にあたる。本事業の14全ての**Working group(WG)**に本学の教職員を配置し、各WGの活動の進捗・課題にも共有し、その運営にも責任を持つ。

②学外との連携体制

各校のコーディネーターおよび実務担当者により定例の**運営協議会**（年2回）を開催し、コンソーシアムとしての方針を決定し、年度毎の事業の進捗および成果の評価を行い、次年度以降の**事業の見直し**を行う。事業に関連した課題は適宜、メールあるいは会議により審議し、**全校一致した見解**により事業を推進していく。14のWorking group(WG)には各校から選出されたメンバーが協働して、各校それぞれの特性や強みを取り入れた質の高い共通の教育コンテンツを構築して、それを運用するために全校が連携する。共通コースでは全校から広く受講者を募ることで、成果として専門的知識・技能を習得した多くの人材輩出に繋がる。また連携する大学の附属病院はがん診療拠点病院、がんゲノム中核拠点・拠点病院を複数含んでおり、充実した診療体制で指導する環境が準備出来ている。

WGでは共通コースの運営だけでなく、各テーマ毎の連携校合同のシンポジウム、セミナー・ワークショップの企画も行い、開催する。

③評価体制

本事業では各校・Working group(WG)による**自己評価**、連携校間・WG間の**相互評価**、外部評価委員による評価（**外部評価**）という3段階からなる評価を行うことで、全ての課題を明らかにして改善に努める。自己評価の内容は事業の成果および進捗を報告する運営協議会（年2回）にて発表し、同時に相互評価も行う。外部評価はがん診療に携わる**多職種（医師、歯科医師、看護師、薬剤師など）**と複数のがん**患者団体**などで構成される委員により行われる（年2回）。委員の一部は他の拠点校の専門職に依頼し、**他の拠点校との連携**にもつなげる。評価にて指摘された課題は連携校・WG間で共有し、速やかに**事業計画の見直し**に繋げる。最終年度の評価ではその年度の評価および6年間の総合評価を受け、その内容を補助期間終了後も自立的に継続する事業への確に反映させる。

(4) 成果の普及や事業の継続

①成果の普及

本事業では次世代がん医療に担う多職種人材の養成を行うために、全7校および各校から選出されたメンバーからなる14のWorking group (WG)が密に連携して、連携校共通コースを含めた人材養成プログラムの開発を行う。開発されるコンテンツは広く広報して、地域の壁を越えて他地区の大学等との間で、協定を締結した上での単位互換、聴講生の受け入れ等により共有を可能にすることで普及に努める。特に本事業の特色である口腔がん・がん口腔支持療法、造血器腫瘍、多職種連携・チーム医療などのコンテンツは他の拠点校とも連携し、ワークショップや講習会等を介してその内容の共有とブラッシュアップを図る。本事業では**広報担当者**（広報担当特任教授と臨床腫瘍学分野講師の計2名）を配置する。広報担当者は参加校・WG間の情報共有と連携に加えて、他の拠点校を含む他地域の大学や医療機関に向けて本事業の情報発信を行い、その内容を広く普及させる役割を担う。また**関連学会**、**患者団体**とも連携し、その普及の効果を高めることに努める。

②事業の継続

補助期間終了後も本事業の連携7校による**コンソーシアム**を継続して、「がんプロフェッショナル養成プラン」の事業を継続する。実際、令和4年度を継続した。その継続のためには各校にて主に正規課程コースのための予算を計上するが、今回の事業の7連携校および14のWorking group (WG)により構築する多くの**コンテンツ**を**共同で改編**しながら共有し続け、単位互換も可能とすることで自立的に事業を継続する。単一の大学での継続は容易ではないが、複数校からなるコンソーシアムであれば、効率的に質の高い教育システムを継続することが可能となる。各校が首都圏に集約していることから、同期型講義や実習・演習も受講者への負担が少なく継続可能である強みもある。また質の高い魅力的なコンテンツの開発を続けることで、連携校が増え、より規模の大きいコンソーシアムに発展させることでさらなる効率化を目指す。

③第3期がんプロの継続状況

※代表校（申請大学）における第3期がんプロで開設した大学院正規課程コースを全て記載し、令和4年度の学生募集の有無を○×で選択してください（第3期がんプロで選定されていない大学は記入不要）。

| 番号 | 教育プログラム・コース名 | 令和4年度の学生募集の有無 |
|----|-------------------|---------------|
| 1 | ゲノム医療者養成コース | ○ |
| 2 | 小児がん・希少がん医療者養成コース | ○ |
| 3 | 緩和ケア医療者養成コース | × |
| 4 | | |
| 5 | | |
| 6 | | |
| 7 | | |
| 8 | | |
| 9 | | |
| 10 | | |

2. 年度別の計画

(1) 年度別の計画

| | |
|------------------------|--|
| R5年度 | <ul style="list-style-type: none"> ① 6～9月 連携校全体による運営協議会・Working group(WG)合同会議開催 ② 6～9月 動画配信システムの構築・運用開始 ③ 6～12月 各校におけるコース開講の準備 ④ 9月～ 一部のコース開講 ⑤ 9月～ 各WG・WG合同によるセミナー・ワークショップ開催 (計8回) ⑥ 1～3月 連携校全体による運営協議会・WG合同会議開催・外部評価 ⑦ 1～3月 連携校合同シンポジウム ⑧ 6～3月 関連学会における調査と情報収集 |
| R6年度 | <ul style="list-style-type: none"> ① 4月 各大学およびWGによるプログラム・コース開講 ② 6～7月と1～3月 連携校全体による運営協議会・WG合同会議開催・外部評価 ③ 9～12と1～3月 連携校合同シンポジウム ④ 9～12月 患者団体との連携による公開講座の支援・開催 ⑤ 4～3月 各WG・WG合同によるセミナー・ワークショップ開催 (計15回) |
| R7年度 | <ul style="list-style-type: none"> ① 4月 各大学およびWGによるプログラム・コース開講 ② 6～7月と1～3月 連携校全体による運営協議会・WG合同会議開催・外部評価 ③ 9～12と1～3月 連携校合同シンポジウム ④ 9～12月 患者団体との連携による公開講座の支援・開催 ⑤ 4～3月 各WG・WG合同によるセミナー・ワークショップ開催 (計15回) |
| R8年度 | <ul style="list-style-type: none"> ① 4月 各大学およびWGによるプログラム・コース開講 ② 6～7月と1～3月 連携校全体による運営協議会・WG合同会議開催・外部評価 ③ 9～12と1～3月 連携校合同シンポジウム ④ 9～12月 患者団体との連携による公開講座の支援・開催 ⑤ 4～3月 各WG・WG合同によるセミナー・ワークショップ開催 (計15回) |
| R9年度 | <ul style="list-style-type: none"> ① 4月 各大学およびWGによるプログラム・コース開講 ② 6～7月と1～3月 連携校全体による運営協議会・WG合同会議開催・外部評価 ③ 9～12と1～3月 連携校合同シンポジウム ④ 9～12月 患者団体との連携による公開講座の支援・開催 ⑤ 4～3月 各WG・WG合同によるセミナー・ワークショップ開催 (計15回) |
| R10年度 | <ul style="list-style-type: none"> ① 4月 各大学およびWGによるプログラム・コース開講 ② 6～7月と1～3月 連携校全体による運営協議会・WG合同会議開催・外部評価 ③ 9～12と1～3月 連携校合同シンポジウム ④ 9～12月 患者団体との連携による公開講座の支援・開催 ⑤ 4～3月 各WG・WG合同によるセミナー・ワークショップ開催 (計15回) |
| R11年度 [補助期間 終了後] | <ul style="list-style-type: none"> ① 連携校全体による運営協議会・WG合同会議開催 (年2回) ② 各大学正規課程およびWorking group(WG)による連携7校共通コースの継続 ③ 連携校合同のシンポジウムの開催 (年2回) ④ 4～3月 各WG・WG合同によるセミナー・ワークショップ開催 (計10回) ⑤ 患者団体との連携による公開講座の支援・開催 (年1～2回) |

総表

1. 参加大学の状況

拠点病院の指定やがんに特化した講座設置等に該当する場合は○を、補助事業期間中に指定取得や設置等を計画している場合は□を選択してください。(既に講座があり、追加を計画している場合には■を選択してください。)

| 大学名 | がん診療連携拠点病院 | | | | | 地域がん診療病院 | 小児がん拠点病院 | がんゲノム医療病院 | | | がんの特化した講座 | | | | バイオバンク | 大学ごとのR5補助金配分額(千円) |
|----------|------------|---------|----|---------|------|----------|----------|-----------|----|----|-----------|-------|------|-----|--------|-------------------|
| | 都道府県 | 地域(高度型) | 地域 | 地域(特例型) | 特定領域 | | | 中核拠点 | 拠点 | 連携 | 薬物療法 | 放射線治療 | 緩和医療 | その他 | | |
| 東京医科歯科大学 | | | ○ | | | | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 19,675 |
| 慶應義塾大学 | | | ○ | | | | | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | □ | 14,467 |
| 国際医療福祉大学 | | | | | | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | 9,630 |
| 順天堂大学 | | | ○ | | | | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | 11,758 |
| 東海大学 | | | ○ | | | | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | □ | 12,653 |
| 東京歯科大学 | | | ○ | | | | | | | | | | ○ | | | 5,317 |
| 東京薬科大学 | | | | | | | | | | ○ | | ○ | | | | 3,970 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | |

| | |
|--------------------|---|
| がんの特化した講座の名称 | <p>東京医科歯科大学: 臨床腫瘍学分野、腫瘍放射線治療学分野、分子腫瘍医学分野、歯科放射線診断・治療学分野、頭頸部外科学、顎口腔腫瘍外科学</p> <p>慶應義塾大学: 腫瘍センターゲノム医療ユニット、先端医科学研究所(がん免疫)、分子腫瘍薬学講座、放射線科学教室放射線治療科</p> <p>国際医療福祉大学: 医学部臨床腫瘍学、成田病院腫瘍内科、緩和医療科</p> <p>順天堂大学: 臨床腫瘍学研究室、放射線治療学講座、緩和医療学研究室</p> <p>東海大学: 血液・腫瘍内科学、放射線治療科学、緩和医療学、乳腺・腫瘍科学</p> <p>東京歯科大学: 口腔腫瘍外科学講座</p> <p>東京薬科大学: 臨床薬剤学教室 医薬安全管理学教室</p> |
| バイオバンクの保存試料数(がん関係) | 東京医科歯科大学: 6,338症例分 |

2. 教育プログラム・コース一覧

(1) 大学院正規課程コース

| 大学名 | テーマ | 教育プログラム・コース名 | 養成目標人数合計 | 養成する職種に○、がん専門資格と連動している場合◎を選択 | | | | | | |
|----------|------|--------------------------|----------|------------------------------|------|-----|-----|---------|-------|--|
| | | | | 医師 | 歯科医師 | 薬剤師 | 看護師 | その他の医療職 | 医療職以外 | |
| 東京医科歯科大学 | テーマ① | 造血器腫瘍専門医養成コース | 15 | ◎ | | | | | | |
| 東京医科歯科大学 | テーマ① | がん病理診断医・技師養成コース | 15 | ◎ | | | | ○ | | |
| 東京医科歯科大学 | テーマ① | がんゲノム医療人材養成コース | 10 | ◎ | | | | | | |
| 東京医科歯科大学 | テーマ① | 腫瘍循環器専門医養成コース | 15 | ○ | | | | | | |
| 慶應義塾大学 | テーマ① | ライフステージ別がん専門リハビリ療法士養成コース | 5 | | | | | ○ | | |
| 慶應義塾大学 | テーマ① | 内科系臨床腫瘍医養成コース | 10 | ◎ | | | | | | |
| 慶應義塾大学 | テーマ① | 外科系臨床腫瘍医養成コース | 20 | ◎ | | | | | | |
| 慶應義塾大学 | テーマ① | 放射線治療専門医養成コース | 3 | ◎ | | | | | | |
| 慶應義塾大学 | テーマ① | 緩和医療専門医養成コース | 10 | ◎ | | | | | | |

| | | | | | | | | | |
|----------|------|---|-----|---|---|---|---|---|---|
| 慶應義塾大学 | テーマ① | リハビリ専門医養成コース | 3 | ○ | | | | | |
| 慶應義塾大学 | テーマ① | 臨床医学物理研修研究コース | 8 | | | | | ○ | |
| 慶應義塾大学 | テーマ② | がんライフステージケア研究コース | 5 | | | | ○ | | |
| 慶應義塾大学 | テーマ③ | がん個別化医療を支える専門看護師コース | 10 | | | | ○ | | |
| 慶應義塾大学 | テーマ③ | 腫瘍薬学コース | 5 | | | ○ | | | |
| 慶應義塾大学 | テーマ③ | がん先端医療研究コース | 15 | ○ | ○ | | | | |
| 国際医療福祉大学 | テーマ① | がん看護CNSコース | 15 | | | | ○ | | |
| 国際医療福祉大学 | テーマ① | がん医療の現場で顕在化している課題に多職種連携で挑む人材育成コース | 35 | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 国際医療福祉大学 | テーマ② | がん個別化医療・創薬の推進を目指したゲノム医療やがん免疫療法の開発を担う人材養成コース | 10 | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 国際医療福祉大学 | テーマ③ | がんのデータサイエンスに基づく予防医療やがんサバイバーケアを推進する人材育成コース | 15 | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 順天堂大学 | テーマ① | 順天堂大学 がん医療専門人材養成コース① | 25 | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | | |
| 順天堂大学 | テーマ② | 順天堂大学 がん医療専門人材養成コース② | 25 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| 順天堂大学 | テーマ③ | 順天堂大学 がん医療専門人材養成コース③ | 25 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| 東海大学 | テーマ① | がん患者の倫理・社会的問題に対する支援者養成コース | 9 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 東海大学 | テーマ③ | がんゲノム/遺伝看護の高度実践者養成コース | 9 | | | | ○ | | |
| 東京歯科大学 | テーマ① | 口腔がん治療専門医養成コース | 25 | | ◎ | | | | |
| 東京歯科大学 | テーマ① | 支持療法専門医養成コース/口腔ケア・摂食嚥下リハビリテーション・栄養療法分野 | 10 | | ◎ | | | | |
| 東京歯科大学 | テーマ② | 顎顔面補綴専門医養成コース | 5 | | ◎ | | | | |
| 東京薬科大学 | テーマ① | 臨床腫瘍専門薬剤師養成コース | 10 | | | ◎ | | | |
| 東京薬科大学 | テーマ③ | CAR-T療法・ICIに特化した専門薬剤師養成コース | 10 | | | ◎ | | | |
| 合計 | | | 377 | | | | | | |

(2) インテンシブコース ※コースワークで複数の科目等を履修するものとし、1日～数日間の講習会は除く。

| 大学名 | テーマ | 教育プログラム・コース名 | 養成目標人数合計 | 医師 | 歯科医師 | 薬剤師 | 看護師 | その他の医療職 | 医療職以外 |
|----------|------|-----------------------------------|----------|----|------|-----|-----|---------|-------|
| 慶應義塾大学 | テーマ① | がんゲノム医療実装化コース | 42 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 慶應義塾大学 | テーマ① | 痛みの集学的治療コース | 48 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 慶應義塾大学 | テーマ① | 薬剤師緩和医療実践コース | 24 | | | ○ | | | |
| 慶應義塾大学 | テーマ① | 小児がんコース | 12 | ○ | | | | | |
| 慶應義塾大学 | テーマ① | 骨転移診療コース | 6 | ○ | | | | | |
| 慶應義塾大学 | テーマ① | ライフステージ別がんリハビリテーション習得コース | 24 | ○ | | | | ○ | |
| 慶應義塾大学 | テーマ① | がん薬物療法実践コース | 5 | | | ○ | | | |
| 国際医療福祉大学 | テーマ① | がん医療の現場で顕在化している課題に多職種連携で挑む人材育成コース | 15 | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |

| | | | | | | | | | |
|----------|------|---|-----|---|---|---|---|---|---|
| 国際医療福祉大学 | テーマ② | がんのデータサイエンスに基づく予防医療やがんサバイバーケアを推進する人材養成コース | 10 | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 国際医療福祉大学 | テーマ③ | がん個別化医療・創薬の推進を目指したゲノム医療やがん免疫療法の開発を担う人材養成コース | 15 | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 東京薬科大学 | テーマ① | 臨床腫瘍専門薬剤師養成コース | 25 | | | ◎ | | | |
| 連携校共通 | テーマ① | 連携7校共通:緩和医療連携コース | 100 | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | |
| 連携校共通 | テーマ① | 連携7校共通:難治性がん性疼痛に対する集学的アプローチ連携コース | 100 | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | |
| 連携校共通 | テーマ① | 連携7校共通:緩和的放射線治療・密封小線源治療・高精度放射線治療の質の向上と普及を担う人材養成コース | 50 | ◎ | | ○ | ◎ | ◎ | |
| 連携校共通 | テーマ① | 連携7校共通:がん学際領域の医療者養成コース | 55 | ◎ | ○ | ◎ | ○ | ○ | |
| 連携校共通 | テーマ① | 連携7校共通:がん薬物療法専門医療人養成コース | 60 | ◎ | | ◎ | ◎ | ○ | |
| 連携校共通 | テーマ① | 連携7校共通:造血器腫瘍専門医養成コース | 75 | ◎ | | | | | |
| 連携校共通 | テーマ① | 連携7校共通:造血器腫瘍に携わる医療者養成コース | 110 | ○ | ○ | ◎ | ○ | ○ | |
| 連携校共通 | テーマ① | 連携7校共通:口腔がん・がん口腔支持療法に携わる医療者養成コース | 100 | ○ | ◎ | ○ | ○ | ◎ | |
| 連携校共通 | テーマ② | 連携7校共通:医療ビッグデータに基づくがんの予後予測と予防コース | 50 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 連携校共通 | テーマ② | 連携7校共通:がん予防を推進する遺伝医療職育成コース | 50 | ◎ | | | ◎ | ◎ | |
| 連携校共通 | テーマ② | 連携7校共通:がんサバイバーを支える多職種医療人養成コース | 150 | ○ | ○ | ○ | ◎ | ◎ | |
| 連携校共通 | テーマ③ | 連携7校共通:個別化医療人養成コース | 165 | ◎ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 連携校共通 | テーマ③ | 連携7校共通:がんゲノム、遺伝子細胞療法や免疫療法などの先端医療技術、およびビッグデータ、AIを駆使したがん創薬コース | 70 | ○ | ○ | ◎ | ○ | ○ | |
| 連携校共通 | テーマ③ | 連携7校共通:先端医療技術を用いた個別化医療、レギュラトリーサイエンスを駆使し難治性がん克服戦略を立案し推進できる医療人養成コース | 70 | ○ | ○ | ◎ | ○ | ○ | |
| 連携校共通 | テーマ③ | 連携7校共通:CAR-T療法・ICIに特化した専門薬剤師養成コース | 50 | | | ◎ | | | |

合計 1,481

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学医歯学総合研究科大学院 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 造血器腫瘍専門医育成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医歯学総合研究科大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | ①造血器腫瘍の正確な診断を迅速にできる能力を有する人材 ②造血器腫瘍の予後、治療法の決定に必要なゲノム異常を含めた最先端の検査が活用できる人材 ③造血器腫瘍に対する化学療法、分子標的療法、造血幹細胞移植を含めた細胞療法を用いた集学的な治療が実施できる人材 ④合併症の管理、長期生存者の適切なフォローアップができる人材 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 専門領域必修科目18単位および下記の追加必修項目を含めて、30単位以上を履修し、学位論文を提出の上、審査、最終試験に合格すること | | | | | | |
| 履修科目等 | <必修科目> 所属専門分野の必修18単位に加えて、造血器腫瘍（1単位）＋造血器腫瘍実践実習（2単位）＋がん化学療法特論（1単位） <選択科目> がんプロフェッショナル養成プランのがん生物学・解剖学・病理学（1単位）、臨床腫瘍学（1単位）、腫瘍放射線治療学特論（1単位）、放射線診断学・核医学特論（1単位）、緩和ケア・緩和医療学（1単位）、口腔がん・がん口腔支持療法（1単位）から2単位以上 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 血液専門医（日本血液学会）、小児血液・がん専門医（日本小児血液・がん学会）、造血細胞移植認定医（日本造血・免疫細胞療法学会）の研修施設として認定。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 白血病・悪性リンパ腫を含めた造血器腫瘍は固形がんに比べるとその頻度は低い（最も多い悪性リンパ腫で全がん腫の3-4%程度）。しかし、その治療は殺細胞性治療薬に続き、最も早くから分子標的薬、造血幹細胞移植などが導入され、予後を大幅に改善している。また遺伝子異常、ゲノム解析の情報も蓄積して、固形がんが遅れているが、その臨床応用が開始されている。本プログラムは診断および予後予測・治療法決定に必要な白血病幹細胞の生理学、遺伝子異常・ゲノム解析、各種診断手法、病理形態学を学内外の専門家から指導し、がん化学療法、分子標的薬、造血幹細胞移植およびCAR-T療法の指導を合併症の管理を含めた指導まで行う。特に近く導入される遺伝子パネル検査を適切に活用できる能力の習得を目指す。また当学のがんプロフェッショナル養成にある放射線治療、緩和医療学、腫瘍循環器病学などの基礎から最先端の知識を習得し、診断から治療、その後のフォローアップまで一貫した管理ができる専門医を育成する。可能な範囲で遠隔講義やe-learningを用いることで受講者の利便性に配慮した受講環境を整備する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 東京医科歯科大学病院および連携する施設の血液内科および小児科に属する血液専門医・指導医、造血細胞移植認定医が中心となり、病理専門医、臨床検査専門医、放射線治療専門医、がん薬物療法専門医、基礎研究者等と連携して指導にあたる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 血液専門医、小児血液・がん専門医、造血細胞移植認定医等の資格を取得し、地域の中核病院やがん拠点病院にて造血器腫瘍の専門的医療を提供できる医療者。造血器腫瘍以外のがん腫に合併する血液異常を適切に診断し、他科専門医と連携して管理できる医療者。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 15 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の造血器腫瘍に関連する分野の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度3人以上の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を3人/年と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学医歯学総合研究科大学院 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がん病理診断医・技師育成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医歯学総合研究科大学院生（医師、臨床検査技師） | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | ①様々な腫瘍性疾患、稀少癌の病理診断、細胞診断を行う能力を有する人材 ②様々な腫瘍性疾患、稀少癌に対する分子病理学的診断を理解できる人材 ③AIを活用した補助病理診断システムの理解ができる人材 ④デジタル病理診断システムの理解、実行ができる人材 ⑤新しい病理学的実験法について理解、開発できる人材 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | がんプロフェッショナル養成プラン科目6単位、所属分野の専門科目18単位、他科目を合わせて30単位以上を履修し、学位論文を作成し提出、審査、最終試験に合格すること | | | | | | |
| 履修科目等 | <必修科目> 所属する専門分野の科目、がんプロフェッショナル養成プランの病理診断学（1単位）＋病理診断実習（1単位）と合わせて18単位 <選択科目> がんプロフェッショナル養成プランのがんの生物学・解剖学・病理学（1単位）、臓器別がん（1単位）、小児・稀少癌、がんゲノム（1単位）、臨床腫瘍学（1単位）などから4単位以上選択し、所属する専門分野以外の単位と合わせて計12単位以上 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 病理専門医（日本病理学会）、細胞検査士（臨床細胞学会） | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 稀少癌を含め、様々な臓器の腫瘍性疾患について、それぞれの領域のエキスパートから講義を受け、実習によって知識の定着をすることができる。実習においては大学病院における病理診断に携わり、専門家から報告書の添削など直接的な指導を得ることができる。デジタル画像、バーチャルスライド化されたアーカイブ資料を使って多くの稀少癌の病理診断について学ぶことができる。今後必要となるAIを活用した病理診断の最前線、診断システム開発の専門家の講義が受けられる。癌の病理診断にとって重要性を増している分子診断についての最新情報、検体管理について専門家の講義を受けることができる。デジタル画像技術を利用した遠隔病理診断システムの構築、応用について専門家の講義を受けることができる。病理学的研究の最先端、新しい疾患モデルについて講義を得ることができる。これらの内容は従来の病理学教育では得難いものであり、新規性、独創性を有している。 | | | | | | |
| 指導体制 | 東京医科歯科大学病院病理部、人体病理学・包括病理学・口腔病理学分野、連携する施設の病理診断部門の病理専門医、細胞診専門医が指導に当たる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 病理専門医、細胞検査士を取得し、大学病院の教員、地域の中核病院やがん拠点病院にてがんの病理診断のスペシャリストとして活躍する。大学病院と地域の病院とはデジタル病理診断システムを利用して連携する。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 15 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度3人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を3人/年と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学医歯学総合研究科大学院 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がんゲノム医療人材養成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | がん個別化医療の現状の問題点を理解し、創薬等を通して対応を行うことができる医療者の養成を目指す。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 本コースで定める科目について、対面授業、オンライン授業、シンポジウム、セミナー、オンライン症例検討会（エキスパートパネル）、患者実習等を履修し、試験やレポート、指導教官との討論等を通して評価を行う。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <p><座学（必修科目）> がんゲノム医療イントロダクション、ゲノム・遺伝子・DNAの基礎、ゲノム解析の方法、シークエンスデータの解析方法、がん遺伝子パネル検査、がんゲノム医療の臨床的有用性講義、シグナル経路総論講義、シグナル経路①RTK（EGFR, HER2, HER3, HER4）、シグナル経路②RTK（ALK, ROS1, RET）、シグナル経路③RTK（FGFR, KIT/PDGFR, MET/VEGFR）、シグナル経路④PI3K経路、シグナル経路⑤MAPK経路、シグナル経路⑥WNT, NOTCH, HEDGEHOG経路、シグナル経路⑦Cell cycle, TP53、シグナル経路⑧DNA修復、MSI、LOH、シグナル経路⑩Epigenomics、シグナル経路⑪Metabolic pathway講義、二次的所見と遺伝性疾患、C-CATへのデータ共有と利活用、検体の品質管理</p> <p><演習（選択科目）> エキスパートパネル、患者実習</p> <p><セミナー/シンポジウム> 一線級の専門家による創薬や全ゲノム解析等に関するセミナー/シンポジウム</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 腫瘍内科専門医（日本臨床腫瘍学会）、分子病理専門医（日本病理学会）遺伝性腫瘍専門医（日本遺伝性腫瘍学会）の研修施設として認定。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 本コースは、がん個別化医療の初学者が、基礎から最先端の応用まで一気通貫で学ぶ事ができ、また、座学のみならず、実習・演習を通し高い応用力の養成を目指す。 | | | | | | |
| 指導体制 | 連携校の各領域（臨床腫瘍学、がんゲノム、病理学、臨床遺伝学、看護学、薬学など）のエキスパートが合同でコースの座学、実習、演習を担当する。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | <p>【がん個別化医療に携わる医療人】</p> <ul style="list-style-type: none"> 各施設にて、がん個別化医療に精通した医療者として活躍 <p>【想定される専門職】</p> がん薬物療法専門医、臨床遺伝専門医/遺伝性腫瘍専門医、創薬の専門家（製薬メーカー等）、バイオインフォマティクス専門家等 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 10 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | がんゲノム医療拠点病院としての東京医科歯科大学と連携している病院が現在3病院あり、合計4施設となる。それらの病院へ配置する医師を2名ずつ配置することを目標とすると8名養成する必要がある。また、過去の志願者数及び入学ニーズ調査から考慮し、受入れ目標人数を10人と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学医歯学総合研究科大学院 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 腫瘍循環器専門医育成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医歯学総合研究科大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | ①がん患者の心血管系合併症を適切に診断し、個々の患者に応じた最適なマネジメントができる人材 ②がん患者に対する治療の特性を十分に理解し、がん治療医およびその他の職種と連携できる人材 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 専門領域必修科目18単位および下記の追加必修・選択科目を含めて、30単位以上を履修し、学位論文を提出の上、審査、最終試験に合格すること | | | | | | |
| 履修科目等 | <必修科目> 所属専門分野の必修18単位に加えて、腫瘍循環器（1単位）＋腫瘍循環器実践演習（2単位）＋がん化学療法特論（1単位） <選択科目> がん生物学・解剖学・病理学（1単位）、臨床腫瘍学（1単位）、腫瘍放射線治療学特論（1単位）、放射線診断学・核医学特論（1単位）から2単位以上 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 現在、腫瘍循環器の専門医の資格は無いため、連携なし。ただし、循環器専門医（日本循環器学会）、心エコー図専門医（日本心エコー図学会）とは連携。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 近年、がん治療は著しい進歩がみられ、殺細胞性治療薬、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤（ICI）が登場したほか、白血病などの造血器腫瘍では大量抗がん剤投与・造血幹細胞移植、CAR-T療法などが導入され、その予後は大きく改善している。しかし、これらの治療では心血管合併症の合併がみられ、それが原因で患者が死亡する、あるいは大きく生活の質（QOL）・日常生活活動度（ADL）が障害される。その腫瘍循環器領域は注目されているが、それを専門とする医師は少ないのが現状である。 本プログラムは個々の患者における適切な診断、新規治療薬を含めた最適な治療法の選択・実践、中長期フォローアップができる腫瘍循環器の専門医の育成を目指した指導を行う。講義だけでなく、実習・演習を取り入れることで、知識だけでなく実践できる専門医の育成を行う。指導内容としては、心エコーによる評価、バイオマーカーによる評価、薬剤およびICI関連の心筋障害、静脈血栓症、催不整脈性、肺高血圧症、腫瘍循環器ガイドラインの詳細な解説などからなり、腫瘍循環器領域の網羅的な指導を行う。 可能な範囲で遠隔講義やe-learningを用いることで受講者の利便性に配慮した受講環境を整備する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 東京医科歯科大学病院および連携する施設の腫瘍循環器に精通した循環器内科専門医・指導医が中心となり、がん診療を専門とする学内外のがん薬物療法専門医、造血器腫瘍専門医、放射線治療専門医、看護師、薬剤師等が連携して指導を行う。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 循環器専門医、心エコー図専門医等の資格を取得し、大学病院、地域の中核病院、がん拠点病院において多職種と連携してがん患者に合併する心血管合併症の予防、診断、マネジメントを行い、がん患者の生存予後の改善に貢献する。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 15 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の循環制御内科学分野における大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度1人以上の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を3人/年と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|---|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | ライフステージ別がん専門リハビリ療法士養成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 修士課程大学院生(理学療法士・作業療法士・言語聴覚士)・腫瘍リハビリテーション医学 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 2年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | <ul style="list-style-type: none"> ・がんリハビリテーションに関して、ライフステージごとに異なる知識・スキル、病期（予防・回復・維持・緩和）に応じた実践方法を習得することで、がん患者特有に生じる各種機能障害を予防、治療するためのリハビリを行える専門療法士(理学療法士・作業療法士・言語聴覚士)を養成する。 ・個々の専門職の特性を生かして、がんチーム医療の中でリハビリを実践する臨床能力を身につけ、腫瘍リハビリテーションに関する臨床研究を実践する能力を習得し、国際的に活躍し指導的役割を担うリーダーを育成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 選択必修科目26単位以上を修得し、修士論文の審査に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <p>選択必修科目26単位以上を修得したうえで、以下の①、②、③を充足すること。 修士論文の審査に合格すること。 <必修科目>医学概論(基礎的概論)(5単位)、医療倫理学(2単位)、医学概論(ヒトの構造・機能・病態概論)、医学方法論(2単位)、研究臨床体験プログラム(1単位)、医科学特別研究(16単位)、ヘルスエコノミクス(4単位)、産業経済分析：ヘルスケア産業(4単位) ①以下の選択科目を履修し、単位を修得する：リハビリテーション医学(2単位)、がんのリハビリテーション学(2単位)；②以下の全ての修士・博士課程併設設置科目を選択科目として履修し、単位を修得する：医学統計学(2単位)、基礎腫瘍学(2単位)、臨床腫瘍学(2単位)、先端ゲノム医学(1単位)；③博士課程「緩和医療学」を聴講する。</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | リハビリテーション科専門医（日本リハビリテーション医学会）の研修施設として認定。「がん患者リハビリテーション料」、「リンパ浮腫複合的治療料」の算定要件を満たす施設として認定。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | <p>2016年12月に改定されたがん対策基本法に「がん患者の状況に応じた良質なリハビリテーションの提供が確保されるようにすること」が追加され、がんリハビリテーションに関する施策を推進する方針となった。しかしがん専門医療機関においてすら、がんリハビリテーションが十分実施されていない。</p> <p>これまでのがんプロのがんリハビリテーションのコースは本学、京都大学、神戸大学のみであり、引き続き推進すべき分野であり、がんリハビリにフォーカスした修士課程コースは極めてユニークであり、独創性がある。</p> <p>本コースではがんサバイバーシップケアとしてのリハビリテーションの取り組みを含めた体系的な教育プログラム・コースを構築しており、がん患者のライフステージや病期別に、がんサバイバーシップケアとしてのがんリハビリテーションの診療と研究を体系的に学べるという点で新規性がある。</p> | | | | | | |
| 指導体制 | がん医療の質の向上等により、がんサバイバーが増加しつつある中、がんサバイバーに対するケアの推進が喫緊の課題であるが、リハビリテーション診療は、治療と仕事の両立支援、介護予防、終末期の療養生活の維持・向上の観点からも、重要な役割を担う。がんリハビリテーションのエキスパートである指導教授・担当教官がマンツーマンで各地域でリーダーとなるリハビリテーション専門職の養成を行う。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | <ul style="list-style-type: none"> ・本大学博士課程への進学 ・がん専門医療機関へ就職し、各地域において、がんリハビリテーションを実践する指導者となる。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度1人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を1人と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 内科系臨床腫瘍医養成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科博士課程大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 養成すべき人材像は、個々の専門科の特性を生かしながら、がんチーム医療の中でがん薬物療法を実践する臨床能力とともに、がんに関する臨床研究を実践する能力を身に付けた人材である。また、がん生物学・遺伝学などに基づいてがんゲノム情報を解釈するとともに、その情報を元に分子標的薬選択や予後予測などの臨床判断を行い、プレジジョンメディスンが実践できる人材である。さらに、高尚な倫理観とリーダーシップを持ち、国際的に活躍し指導的役割を担うリーダー足り得ることが望ましい。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下の【履修科目等】に記載のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | 医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。 <医療科学系専攻主科目> 生命倫理学(1単位)、臨床疫学または基礎疫学(2単位)、医学統計学または基礎生物統計学Ⅰ・Ⅱ(2単位)、所属分野科目(特論・演習・実習)(計16単位) <副科目> 基礎腫瘍学(2単位)、先端ゲノム医学(1単位)、緩和医療学(2単位)、臨床腫瘍学(2単位)、化学療法学(2単位)、臨床研究方法論(1単位) | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | がん薬物療法専門医（日本臨床腫瘍学会）、消化器病専門医（日本消化器病学会）、呼吸器専門医（日本呼吸器学会）、血液専門医（日本血液学会）の研修施設として認定。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 1年時には、がん医療の基盤的知識及び幅広いがん治療に関する講義を実施する。2～3年次には、がんに関連する複数の診療科やがん専門施設（国立がん研究センター、がん研有明病院など）において、多様ながんに対する化学療法、分子標的療法、放射線療法、低侵襲外科、緩和医療・リハビリテーションなどを経験するための臨床研修を実施する。4年次には、がん患者の治療計画をチームリーダーとして立案・実施する訓練を受け、専門的知識と技術を磨くとともに、がん薬物療法専門医や各がんに関連する内科の専門医の受験資格を得ることを目標とする。また、4年間かけて、基礎研究・臨床研究・トランスレーショナル研究の進め方について学習し、がんに関連する研究に従事する。また、エキスパートパネルなどに主体的に参加することにより、がんゲノム医療について学習する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 指導教授：片岡 圭亮（慶應義塾大学医学部内科学教室（血液）教授） 担当教官：浜本 康夫（慶應義塾大学医学部腫瘍センター准教授） 担当教官：安田 浩之（慶應義塾大学医学部内科学教室（呼吸器）准教授） | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | <ul style="list-style-type: none"> ・腫瘍内科医（がん薬物療法専門医取得） ・各がんに関連する内科の専門医・指導医（がん薬物療法専門医・各がんに関連する専門医取得） | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 10 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 5つの連携施設にがん薬物療法専門医を最低2人ずつ配置することを目標にすると、今後5年間で10人養成する。また、過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度2人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を10人と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 外科系臨床腫瘍医養成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 本養成コースは、がん診療を専門化した医師を養成するプログラムであり、がん患者に対し高度な医療を提供することができる以下の人材像が求められる。 1. 理論的知識に基づいた判断力を持つ医師：がん診療に必要な理論的知識を深く理解し、患者の状態に合わせて適切な治療法を選択する能力を持つ人材。 2. 手術手技や技術を熟練させた医師：がん治療に必要な手術手技や技術を習得し、患者の状態に応じた適正な手術や治療を実施する能力を持つ人材。 3. チーム医療に貢献できる医師：がん診療には多職種の専門家が関わるため、チーム医療において協力的に行動する能力を持つ人材。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下の【履修科目等】に記載のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | 医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。 <医療科学系専攻主科目> 生命倫理学(1単位)、臨床疫学または基礎疫学(2単位)、医学統計学または基礎生物統計学Ⅰ・Ⅱ(2単位)、所属分野科目(特論・演習・実習)(計16単位) <副科目> 基礎腫瘍学(2単位)、先端ゲノム医学(1単位)、緩和医療学(2単位)、臨床腫瘍学(2単位)、化学療法学(2単位)、臨床研究方法論(1単位) | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 外科専門医（日本外科学会）、消化器外科専門医（日本消化器外科学会）、乳腺専門医（日本乳癌学会）、産婦人科専門医（日本産婦人科学会）、がん治療認定医（日本がん治療認定医機構）の研修施設として認定。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 1年時には、がん診療の基盤的知識及び幅広いがん治療に関する講義を実施する。講義はそれぞれの領域で活躍している医師によって最新の情報を交えて行われる。2年時には、がん診療には多職種連携が必要不可欠であるため、がんに関連する複数の診療科において薬物療法、放射線療法、緩和医療、外科的治療、リハビリテーションなど複数の専門家と連携して臨床研修を実施する。3年時には、がん専門施設（国立がん研究センター、がん研有明病院など）などで実際の臨床現場での実習、症例検討やカンファレンスなどの充実したカリキュラムが用意されている。4年時には、チーフレジデントとしてがん診療の診察・診断・治療に関わり、がん患者の治療計画をチームリーダーとして立案・実施する修練を受け、手術手技や技術を研鑽するとともに、がん治療認定医や外科系領域のサブスペ専門医の取得を目標とする。また、4年間かけて基礎研究・臨床研究・トランスレーショナルリサーチに従事し、アカデミック外科系医師を育成する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 指導教授：北川 雄光（医学部外科学教室（一般・消化器）教授） 担当教官：山上 亘（医学部産婦人科学教室 教授） | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 外科系臨床腫瘍医は、がん治療の分野で高い専門性を持っているため、幅広いキャリアパスがある。 ・専門医取得後、大学病院やがん専門病院、総合病院などの臨床現場で手術を含めたがん診療を行う一方、教育・研究活動にたずさわることができる。 ・海外へ留学することで、国際的な視野を広げ、最新の治療法や研究成果を学ぶことができる。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 20 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 20の関連がん拠点・連携拠点・連携協力病院に専門医を最低1人ずつ配置することを目標に、今後5年間で20人養成する。過去の志願者数と入学ニーズ調査から毎年4人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を4人と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|---|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 放射線治療専門医養成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科博士課程大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 本養成コースは、がん患者の治療を計画、遂行するための専門的な知識と高度な医療を提供することが可能な人材を養成することを目的とする。具体的には、 1. 患者の状態を把握し、放射線治療の適応について適切に判断でき、チーム医療に貢献できる人材。 2. 放射線治療の種々のモダリティに精通し、治療効果、有害事象に基づいて最適な放射線治療法を説明、提供できる人材。 3. 放射線生物学、放射線物理学の基礎知識を身に付け、放射線治療に関する臨床研究を実践する能力を身に付けた人材。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下の【履修科目等】に記載のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | 医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。 <医療科学系専攻主科目> 生命倫理学(1単位)、臨床疫学または基礎疫学(2単位)、医学統計学または基礎生物統計学Ⅰ・Ⅱ(2単位)、所属分野科目(特論・演習・実習)(計16単位) <副科目> 基礎腫瘍学(2単位)、先端ゲノム医学(1単位)、緩和医療学(2単位)、臨床腫瘍学(2単位)、化学療法学(2単位)、臨床研究方法論(1単位) | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 放射線科専門医（日本医学放射線学会）、放射線治療専門医（日本医学放射線学会・日本放射線腫瘍学会）、がん治療認定医（日本がん治療認定医機構）の研修施設として認定。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 1年時には、がん医療の基盤的知識及び幅広いがん治療に関する講義を実施する。2～3年次には、がんに対する化学療法、分子標的療法、外科的治療、緩和医療・リハビリテーションなどがんに関連する複数の診療科やがん専門施設（国立がん研究センター、がん研有明病院など）において、臨床現場での実習、症例検討、カンファレンスを経験するための臨床研修を実施する。4年次には、がん患者の治療計画をチームリーダーとして立案・実施する訓練を受け、専門的知識と技術を磨くとともに、がん治療認定医や放射線治療専門医の取得を目標とする。また、4年間を通じて、放射線生物学・物理学などの基礎研究・臨床研究・トランスレーショナル研究の進め方について学習し、放射線治療に関連する研究に従事する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 指導教授：茂松 直之（医学部放射線科学教室（治療）教授） 担当教官：深田 淳一（医学部放射線科学教室（治療）専任講師） 担当教官：花田 剛士（医学部放射線科学教室（治療）専任講師） | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | ・放射線治療専門医（放射線治療専門医取得） ・専門医取得後、大学病院やがん専門病院、地域のがん診療拠点病院などの臨床現場で放射線治療を行い、教育・研究活動にたずさわる。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 3 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 3つのがん拠点病院に放射線治療専門医を最低1人ずつ配置することを目標にし、今後5年間で3人養成する。過去の志願者数と入学ニーズ調査から隔年に1人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を3人と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 緩和医療専門医養成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年間 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | <ul style="list-style-type: none"> ・緩和医療についての専門的な知識・スキルを身に受け、患者・家族が求める支援を行うことができる。 ・緩和医療におけるevidenceの構築のための研究の立案、実施ができる。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下の【履修科目等】に記載のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <p>医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。</p> <p><医療科学系専攻主科目> 生命倫理学(1単位)、臨床疫学または基礎疫学(2単位)、医学統計学または基礎生物統計学Ⅰ・Ⅱ(2単位)、所属分野科目(特論・演習・実習)(計16単位)</p> <p><副科目> 基礎腫瘍学(2単位)、先端ゲノム医学(1単位)、緩和医療学(2単位)、臨床腫瘍学(2単位)、化学療法学(2単位)、臨床研究方法論(1単位)</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 緩和医療専門医（日本緩和医療学会）の研修施設として認定。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 緩和医療の普及・啓発は徐々に進んでいるものの、社会のニーズに応えられるだけの専門家の育成は進んでいない。当院は日本でも有数の緩和医療専門の輩出機関であり、本コースでは多職種の専門家による指導により専門性を高めることができる。 | | | | | | |
| 指導体制 | 慶應義塾大学病院および連携する緩和ケア病棟等の緩和医療専門医が直接指導にあたる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | がん拠点病院や地域の中核的病院や医療チームの一員として、専門的な緩和医療を提供できる医療従事者を育成する。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月以降 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 10 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 緩和医療専門医数がまだ300人程度しかおらず、今後10年間で約10人を養成することを目標とする。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|---|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | リハビリ専門医養成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 博士課程大学院生・腫瘍リハビリテーション医学 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | <ul style="list-style-type: none"> ・がんリハビリテーションに関して、ライフステージごとに異なる知識・スキル、病期（予防・回復・維持・緩和）に応じた実践方法を習得し、がん患者特有に生じる各種機能障害を予防、治療するためのリハビリを行えるリハビリテーション科専門医を養成する。 ・がんチーム医療の中でリハビリを実践する臨床能力を身につけるとともに、臨床研究者として腫瘍リハビリテーションに関する臨床研究を実践していきける能力を極めて、国際的に活躍し指導的役割を担うリーダーを育成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下の【履修科目等】に記載のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <p>医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。</p> <p><医療科学系専攻主科目> 生命倫理学(1単位)、臨床疫学または基礎疫学(2単位)、医学統計学または基礎生物統計学Ⅰ・Ⅱ(2単位)、所属分野科目(特論・演習・実習)(計16単位)</p> <p><副科目> 基礎腫瘍学(2単位)、先端ゲノム医学(1単位)、緩和医療学(2単位)、臨床腫瘍学(2単位)、化学療法学(2単位)、臨床研究方法論(1単位)</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | リハビリテーション科専門医（日本リハビリテーション医学会）の研修施設として認定。「がん患者リハビリテーション料」、「リンパ浮腫複合的治療料」の算定要件を満たす施設として認定。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | <ul style="list-style-type: none"> ・2016年12月に改定された、がん対策基本法では、第17条に、「がん患者の状況に応じた良質なリハビリテーションの提供が確保されるようにすること」が追加され、国や地方公共団体においても、がんリハビリテーションに関する施策を推進する方針となった。しかしながら、我が国においては、がん専門医療機関においてすら、がんリハビリテーションが十分実施されているとはいえない。 ・がんのリハビリに関する博士課程は全国で本学以外には皆無である。 ・がんリハビリを専門とする医師が担当教官として直接指導を行う。 ・臨床能力だけでなく、研究者の育成に力を注ぎ、がんリハビリ分野のリーダーを育成を目指すことが大きな特徴である。 ・がんサバイバーシップケアとしてのリハビリテーションの取り組みを含めた体系的な教育プログラム・コースが構築されており、がん患者のライフステージや病期別に、がんサバイバーシップケアとしての、がんリハビリテーションの診療と臨床研究を体系的に学べる。 | | | | | | |
| 指導体制 | リハビリテーション診療は、治療と仕事の両立支援、介護予防、終末期の療養生活の維持・向上の観点からも、重要な役割を担う。がんリハビリテーションのエキスパートである指導教授・担当教官がマンツーマンで各地域でリーダーとなるリハビリテーション科専門医の養成を行う。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | <ul style="list-style-type: none"> ・各地域のがん専門医療機関へ就職し、がんリハビリテーションを実践する指導者となる。大学等のアカデミアへ就職し、がんリハビリテーション診療や研究・教育に従事する指導者となる。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 3 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度0.5人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を0～1人と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|---|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 臨床医学物理研修研究コース(正規課程) | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科博士課程大学院生 | | | | | | |
| 修業年限(期間) | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 近年の放射線治療は、時代の流れと共に、ハードウェア・ソフトウェアの技術進化が止まらない。そのため、その時代の変化に適応して進化していける変進力を必要としている。医学物理士は、医学物理の専門家として放射線治療に欠かせない重要な役割を担うため、早期に実務に参加することが期待されている。本コースで養成すべき人材像は、臨床医学に直結した自然科学と工学技術に対する深い造詣を持ち、無から有を創り出す開発・改革の能力を有する人材である。そして、協調性を持ってチーム医療に貢献し、がん患者に最も最適で、最も効果的な放射線治療を提案できる高度専門医療従事者の養成を目指す。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下の【履修科目等】に記載のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | 医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。 <医療科学系専攻主科目> 生命倫理学(1単位)、臨床疫学または基礎疫学(2単位)、医学統計学または基礎生物統計学Ⅰ・Ⅱ(2単位)、所属分野科目(特論・演習・実習)(計16単位) <副科目> 基礎腫瘍学(2単位)、先端ゲノム医学(1単位)、緩和医療学(2単位)、臨床腫瘍学(2単位)、化学療法学(2単位)、臨床研究方法論(1単位) | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 放射線治療専門医の修練期間(日本医学放射線学会・日本放射線腫瘍学会) | | | | | | |
| 教育内容の特色等(新規性・独創性等) | 1年時には、がん医療の基盤的知識及び幅広いがん治療に関する講義を実施する。2-3年時には、がん治療全体を俯瞰する視点を身に付けるために、がんに関連する複数の診療科やがん専門施設で多様ながんに対する化学療法、分子標的療法、低侵襲外科、緩和医療・リハビリテーションなどを経験するための臨床研修を受けることが可能である(希望制)。4年次には、医学物理の専門家として、放射線治療を受けるがん患者の治療計画を放射線治療医と協力して立案・実施する訓練を受け、専門的な知識・技術を磨く。また、4年間かけて放射線治療の臨床現場を研修し、放射線治療医や診療放射線技師、看護師など、他職種との議論やカンファレンス、講義などを通じて放射線腫瘍学、放射線技術学に対する理解も深めていく。加えて、基礎研究・臨床研究・トランスレーショナル研究の進め方について学習し、がんに関連する研究に従事する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 指導教授：茂松 直之(医学部放射線科学教室(治療)教授) 担当教官：深田 淳一(医学部放射線科学教室(治療)専任講師) 担当教官：花田 剛士(医学部放射線科学教室(治療)専任講師) | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | ・医学物理士 ・診療放射線技師 ・企業人(放射線治療関連企業) | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | 0 | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 | 8 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度1-2人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を8人と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|---|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科博士課程看護学専攻 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がんライフステージケア研究コース(正規課程) | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 健康マネジメント研究科博士後期課程看護学専攻大学院生 | | | | | | |
| 修業年限(期間) | 3年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | ライフステージに応じたがん対策を推進するために、さまざまなライフステージにおける専門的看護、および、生涯にわたりがん対策が必要となる遺伝性腫瘍患者・家族の状況への理解を深め、意思決定支援、妊孕性の課題、治療アドヒアランス、症状管理、セルフケア能力促進に関わる看護介入を設計・管理し、各専門職者と連携・共同し、ライフステージケア研究を推進し、アウトカムを臨床に還元できる看護学研究者の育成を目指す。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 必修科目10単位を履修し、学位論文審査、最終試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <必修科目> 看護学特論Ⅰ(2単位)、看護学特論Ⅱ(2単位)、看護学合同演習(6単位) | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 該当なし | | | | | | |
| 教育内容の特色等(新規性・独創性等) | 修士課程に設置されている小児・母性・成人・老年・遺伝看護等に関するライフステージに関わる幅広い科目履修が可能である。看護学合同演習では、がん対策に不可欠な在宅・公衆衛生・精神看護・老年看護の視点からの内容が組み入れられ、ライフステージに応じたがん対策推進に資する研究の理論と方法論を修得する。 | | | | | | |
| 指導体制 | がん・遺伝・精神という臨床領域に加え、小児・母性・老年看護のライフステージおよび在宅・公衆衛生看護を含む看護学専攻研究科委員21名による指導を中心に、医学研究科をはじめとする学際的な教授陣からの指導が得られる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | がん医療・看護に関わる研究・教育職および臨床・臨地における高度実践者 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の大学院志願者数から毎年度1人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を1人と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科修士課程看護学専攻 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がん個別化医療を支える専門看護師コース(正規課程) | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 健康マネジメント研究科修士課程看護学専攻CNSプログラム(がん看護・遺伝看護・精神看護・老人看護専門看護師) 大学院生 | | | | | | |
| 修業年限(期間) | 2年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | <p>がん患者のライフステージの特徴や課題を理解し、複雑ながんの診断、治療と有害事象、後遺症等に関わる知識・技術と倫理観を養い、最適な個別化医療を支える高度看護実践とケア開発ができる人材を養成する。</p> <p>特にライフステージにおけるがんや治療の長期的な影響(妊孕性温存、認知機能、機能温存・喪失など)を理解したうえで多様な治療選択からの最適な意思決定を支え、治療継続の支援、症状緩和、機能回復に向けたセルフケアを支える高度実践ができる人材を養成する。またがんサバイバーのQOL維持・向上に向けた全人的なケアを習得し、患者、家族および医療者へ教育的な役割を担える人材、多職種でリーダーシップを発揮できる人材、エビデンスに基づく実践開発研究を推進できる人材を養成する。</p> | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 46単位以上を履修し、学位論文審査、最終試験に合格すること | | | | | | |
| 履修科目等 | <p>看護学専攻CNSコース 各専門科目(分野) (24単位)</p> <p>がん看護CNSコース：がん治療看護論(2単位) がん薬物療法看護論(2単位) がん病態生理学(2単位)、がん遺伝看護論(2単位)、緩和ケア演習(2)</p> <p>遺伝看護CNSコース：がん遺伝看護論(2単位)、遺伝看護論(2単位)、遺伝リスク評価法(2単位)、遺伝看護対象論(2単位)、遺伝医療・社会制度論(2単位)、遺伝看護援助論(2単位)、遺伝看護展開論(2単位)</p> <p>専門科目(共通) (14単位)：コンサルテーション論(2単位)、看護倫理(2単位)、他</p> <p>専門看護実習(10単位)、特別研究(4単位)</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | がん看護・遺伝看護・精神看護・老人看護分野の専門看護師教育課程として日本看護系大学協議会より認定 | | | | | | |
| 教育内容の特色等(新規性・独創性等) | <p>本学には、がん看護、遺伝看護、精神看護、老年看護CNSプログラムが設置されているため、各専門分野の高度実践者と融合的に学習し、知識や技術、協働の姿勢を力動的に養うことができる。</p> <p>各CNSプログラムには専門的な医療、看護を深く学ぶために必要な科目が設置されていることに加え、特に大学病院にはがんプロで養成されたがん関連の専門看護師による実習の教育体制も十分に整っている。腫瘍内科・ゲノム医療・緩和医療などの医師とも十分な連携が取れており、最先端のがん医療に関する科目が設置され、習得できる。また大学病院には臨床遺伝学センターが設置されていることから、遺伝看護CNSプログラムの学生はがんゲノム医療に必要な専門知識を幅広く学ぶことが可能である。</p> | | | | | | |
| 指導体制 | 看護学専攻 研究科委員 21名に加え、医学部、臨床遺伝学センターの兼任教員により講義、演習、実習が行われる。特に、がん看護・遺伝看護・精神看護・老年看護分野の専門看護師教育課程を教授する教員により、各専門分野の高度な教育が展開できる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 修士課程修了後、日本看護協会のがん看護専門看護師・遺伝看護専門看護師・精神看護専門看護師・老人看護専門看護師に合格し、各領域の専門看護師として、がんの個別化医療を支える人材として活躍する。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 10 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の大学院志願者数から毎年度1-2人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を2人と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|---|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院薬学研究科 薬学専攻 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 腫瘍薬学コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 慶應義塾大学大学院薬学研究科 薬学専攻博士課程大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | がんの治療法は進歩が著しいが、難治がんや進行がんは、未だに治癒困難である。本コースでは、基礎および臨床腫瘍学の最先端の情報を学び、新たながんの治療法を提案できる研究者・薬剤師の育成を目指す。すなわち、ゲノム医療に代表されるバイオインフォマティクス、AIを駆使したビッグデータ活用、新規免疫療法等を学ぶ。成果を臨床の現場に還元できる研究マインドの高いがん専門薬剤師、あるいは臨床の現場で生じた疑問を研究を通じて解決できる臨床マインドの高いがん研究者を育成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | <ul style="list-style-type: none"> ・必修科目「がん創薬・治療開発特論」「臨床腫瘍薬学特論」を履修し、レポート評価に合格すること。 ・選択科目として「臨床研修特論」への参加も推奨する。これは、がん専門病院における約3ヶ月の国内外のがん専門病院での実務実習を通じて医療現場の問題を認識し、その克服法を学ぶ。ルーブリックを用いた到達度評価を行う。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <p>演習（6単位）、課題研究（16単位）、臨床研究導入講義・実習含む（1単位）、大学院特別講義（3単位）の必修科目に下記の科目を追加する。</p> <p><必修科目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・がん創薬・治療開発特論（1単位）演習を含む講義（12時間）、 ・臨床腫瘍薬学特論（0.5単位）講義（5時間）症例検討・実習（4時間） <p><選択科目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・臨床研修特論（2単位）がん診療拠点病院として国立がん研究センター中央・東病院、がん研究会有明病院、国立成育医療研究センター病院、慶應義塾大学病院の他、海外の病院（米国ノースカロライナ大学、アイオワ大学、ワシントン大学、フロリダ大学、タイ・コンケン大学）での実習も含まれることが当コースの特徴である。 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | がん専門薬剤師（日本医療薬学会）、外来がん治療認定薬剤師（日本病院薬剤師会）の研修単位発行 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がん医療の進歩は著しく、データベース解析や新規免疫療法のさらに先を行く研究テーマを扱ってゆく。その一方で、臨床腫瘍薬学特論や臨床研修特論では、症例検討や臨床実習を通してがん医療現場の問題解決の実際を取り扱ってゆく。さらに、海外の病院での臨床実習も含まれることは特筆に値する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 当研究科40名の大学院指導教員が、上記特論や各講座内での研究指導に当たり、第4期がんプロテーマ③「新たな治療法を開発できる人材の養成」に関わる。講義の一部は医学研究科や他大学の講師にも協力を依頼する。臨床実習は、実習先病院の指導薬剤師が担当し、研究テーマ①「がん医療の現場で顕在化している課題に対応する人材養成」に関わる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 修了生は、大学病院やがん専門病院、さらに地域基幹病院に就職して、がん専門薬剤師や外来がん治療認定薬剤師の資格獲得を目指す。一方、企業の研究基幹で医薬品開発に関わる研究職や省庁などで公務員として医療行政において貢献する修了生も期待する。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 博士課程入学者は、この数年10名程度で、薬剤師として就職する者は2名程度である。毎年コンスタントな入学を受け入れたい、ということから毎年1名とした。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|---|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がん先端医療研究コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科博士課程大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | ゲノム医学・ビッグデータサイエンスの学問的基盤と高い臨床能力を備え、ゲノム創薬研究ならびに先端的ながんの臨床試験を実施できる、倫理観とリーダーシップを備えたフィジシャンサイエンティストたるがんゲノム医療の実践者を養成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下の【履修科目等】に記載のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | 医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。 <医療科学系専攻主科目> 生命倫理学(1単位)、臨床疫学または基礎疫学(2単位)、医学統計学または基礎生物統計学Ⅰ・Ⅱ(2単位)、所属分野科目(特論・演習・実習)(計16単位) <副科目> 基礎腫瘍学(2単位)、先端ゲノム医学(1単位)、緩和医療学(2単位)、臨床腫瘍学(2単位)、化学療法学(2単位)、臨床研究方法論(1単位) | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 慶應義塾大学病院は「がんゲノム医療中核拠点病院」の指定を受けており、中核拠点病院における人材育成事業の対象として、履修者にエキスパートパネルへの出席等を義務付けることにより、ゲノム医療実践力を涵養する。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 主として1年次に、がんプロフェッショナルプランのために設置された「医療科学系専攻」の必修科目（生命倫理学・臨床疫学・医学統計学）に加え、副科目（基礎腫瘍学、先端ゲノム医学、緩和医療学、臨床腫瘍学、化学療法学、臨床研究方法論）の講義・実習により、がんゲノム医療実践の即戦力となる基盤知識を養う。2年次以降、本人の専門診療科に加え、血液内科・放射線治療科・緩和ケアセンターといったがん診療科をローテーションして、多職種連携によるがんゲノム医療の臨床能力を強化する。特に、臨床遺伝専門医や遺伝カウンセラーについて、適切な遺伝情報の取り扱いや患者や家族への対応を学ぶ。さらに、バイオマーカーならびに創薬標的探索・薬事申請・エビデンス評価・薬の市販後調査を含む承認販売後の観察型臨床疫学等の、臨床研究の方法論を習得する。これらを総合して各自臨床研究を推進し、履修内容審査・学位審査を経て、博士（医学）の学位を取得する。必要に応じてがんプロフェッショナルプラン連携施設での臨床・研究も行う。がんプロフェッショナルプラン第3期までは、急速に普及した遺伝子パネル検査に基づくがんゲノム医療への対応能力の涵養を教育の主眼としていたが、今期はこれに加え人工知能を活用し医療ビッグデータに基づくがん予防医療を担う能力を強化することを目指す。 | | | | | | |
| 指導体制 | 金井弥栄（病理学教室・教授）、桜田洋一（石井・石橋記念講座拡張知能医学・教授）、西原広史（臨床研究推進センターゲノム医療ユニット・教授）、大谷壽一（薬剤学教室・教授）、浜本康夫（腫瘍センター副センター長・准教授）、宮冬樹（臨床遺伝学センター・准教授）等が講義・実習を担当し診療各科、腫瘍センター・臨床研究推進センター・臨床遺伝学センターの多職種の教員が総力を挙げて指導する。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 修了者の多くが「がん治療認定医」ならびに「がん薬物療法専門医」資格を取得することが想定される。修了者全員が日本専門医機構による基本19領域専門医資格のいずれかを取得する見込みである。第3期までの修了者は放射線治療専門医・緩和医療専門医・細胞診専門医・検診マンモグラフィー読影認定医等、がん診療の一定領域に特化したより専門性の高い資格も取得しており、がんゲノム医療の一線で診療・研究に従事すると期待される。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 15 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | がんプロフェッショナルプランのための「医療科学系専攻」には、3.9人/年の入学者がおり、年3人以上と判断して、受入れ目標人数を定めた。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究所 看護学分野 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がん看護CNSコース(正規課程) | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 看護師・がん看護CNSコースに在籍している大学院生 | | | | | | |
| 修業年限(期間) | 2年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | がん看護専門看護師として、複雑で解決困難な看護問題を持つ個人、家族、医療従事者等に対して質の高い看護を提供する為に必要な専門的知識、技術、態度を修得することが出来る人材を養成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 必修専門科目26単位、コース共通科目A 8単位以上、コース共通科目B 6単位以上、合計40単位以上を履修し、研究の最終試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | 【専門科目:26単位】高度実践がん看護学講義Ⅰがんに関する病態生理学(2単位)、高度実践がん看護学講義Ⅱがんに関する理論(2単位)、高度実践がん看護学講義Ⅲがんに関する看護援助論(2単位)、高度実践がん看護学講義Ⅳがん薬物療法看護(2単位)、高度実践がん看護学講義Ⅴ緩和ケア(2単位)、高度実践がん看護学演習Ⅰがん薬物療法看護(2単位)、高度実践がん看護学演習Ⅱ緩和ケア(2単位)、高度実践がん看護学実習Ⅰがん診断と治療実習(2単位)、高度実践がん看護学実習Ⅱ専門看護師役割実習、高度実践がん看護学実習Ⅲ緩和ケア実習(4単位)、【コース共通A:8単位】看護研究(2単位)、看護看護教育論(2単位)、看護管理論(2単位)、看護倫理学(2単位)、看護政策論(2単位)、看護コンサルテーション論(2単位)【コース共通:6単位】高度実践フィジカルアセスメント論(2単位)、高度実践病態生理学(2単位)、高度実践臨床薬理学(2単位) | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | がん看護、精神看護、在宅看護、感染管理・感染看護の専門看護師教育課程として日本看護系大学協議会により認定されている。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等(新規性・独創性等) | がん看護、精神看護、在宅看護、感染管理・感染看護の4専門看護師教育課程が設置されている。他分野の院生と学修する機会は多く、広い知識を獲得することが出来る。更に、働きながら学修出来る様に支援している点も本学の特色である。 | | | | | | |
| 指導体制 | 高度医療福祉専門職の人材を育成する為に4研究科、8専攻、多くの分野・コースを有する。看護学分野の教員のみならず、医師、薬剤師等様々な専門職により高度な教育を提供出来る。また、関連医療施設も複数あり、臨地での指導体制も構築されている。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 修士課程修了後、日本看護協会のがん専門看護師試験に合格し、各地域においてがん看護専門看護師としてがんの個別化医療を支える人材として活躍することが出来る。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 <small>※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。</small> | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 15 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の志願者数から受け入れ人数を3人とした。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 国際医療福祉大学大学院医学研究科、薬学・薬科学研究科、医療福祉学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がん医療の現場で顕在化している課題に多職種連携で挑む人材育成コース（正規課程：医学研究科公衆衛生学専攻、薬科学研究科、医療福祉学研究科修士課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師、看護師、保健師、薬剤師、診療放射線技師、臨床検査技師、遺伝カウンセラー、診療情報管理士、理学・作業・言語聴覚療法士、生殖補助医療胚培養師、社会福祉士、介護福祉士、公認心理師（臨床心理士）など | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 2年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 多職種連携チームを形成し、がん医療現場で顕在化している課題一痛みの治療やケア、がん関連学際領域への対応、遠隔病理診断や地域での放射線治療などに関する対応など、広範囲に対応できる医療専門職人材を養成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 必修科目6単位以上を含む10単位以上を履修し、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <p><必修科目></p> <p>がん治療の先端知識の基礎（2単位）、医療プロフェッショナリズム・医療安全（1単位）、がんのカウンセリング概論（2単位）、がん多職種協働アクティブラーニング実習（1単位）</p> <p><選択科目></p> <p>緩和医療一般（2単位）、がん疼痛へのアプローチ（2単位）、腫瘍循環器学際領域（2単位）、老年腫瘍学際領域（2単位）、腫瘍腎臓病学際領域（2単位）がんサバイバーケア（2単位）（以上連携校共通インテンシブプログラム）、がん治療薬学（2単位）、臨床腫瘍学各論（1単位）、臨床疫学概論（2単位）、診療情報管理学（2単位）、がん診療の基礎知識（2単位）、がん看護学（2単位）、がん治療放射線医科学（2単位）、臨床心理学概論（2単位）、がん臨床検査学（1単位）など</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 腫瘍内科専門医（日本臨床腫瘍学会）、がん専門看護師（日本看護協会）、認定遺伝カウンセラー（日本遺伝カウンセリング学会）、臨床心理士（日本臨床心理士資格認定協会）、緩和ケア専門医（日本緩和医療学会）など | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 従来の専門性に基づいた縦割り教育を廃し、大学院に学ぶ異なる専門領域の学生がクロスオーバーし、さらに連携校の学生と積極的に協働し、がん医療の現場で顕在化している課題に多職種で挑み、患者支援に関わる専門医療職の養成を目指す点に特色を持つ。特に痛みのケア・治療に関しては医師の他に臨床心理士が参加することで、精神的な支援に関して多様なアプローチを実施できる。 | | | | | | |
| 指導体制 | 本コースを受講する各院生の出身母体の分野専攻の責任者および指導教員が責任を持って指導を行う。加えて、共通項目の学修に関しては、本がんプロを運営する推進委員会委員が連携校の委員と共にWGを編成して対応する。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 医師のみならず看護師、薬剤師、PT・OT・ST、診療放射線技師、臨床検査技師、遺伝カウンセラー、ケアマネージャーや介護福祉士、公認心理師など多様な職種の医療スタッフがそれぞれの立場からがん患者に最善の支援を提供できる専門家となり、がん診療病院で指導的役割を担うことを期待され、がん患者、支援者のみならず社会や地域に大きな利益をもたらす。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 35 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の大学院のがんプロ志願者数及び大学院医学研究科公衆衛生学専攻及び医療福祉学研究科の入学実績から、受け入れ目標人数を7人と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 国際医療福祉大学大学院医学研究科、薬学・薬科学研究科、医療福祉学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がん個別化医療・創薬の推進を目指したゲノム医療やがん免疫療法の開発を担う人材養成コース（正規課程：医学研究科公衆衛生学専攻、薬科学研究科、医療福祉学研究科修士課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師（腫瘍内科・血液内科、遺伝医学、病理医、免疫学、外科、放射線科など）、看護師、薬剤師、診療放射線技師、臨床検査技師、遺伝カウンセラーなど | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 2年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 特にがんゲノム解析技術やがん免疫療法を大きな柱として、最新の個別化医療・創薬開発の推進に関する知識と意欲を持ち、がんの個別化診療とくにゲノム医療やがん免疫療法の開発を担う実力を有した医療専門職人材を養成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 必修科目7単位以上を含む10単位以上を履修し、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <必修科目> がん遺伝子解析学（1単位）、臨床腫瘍学各論（1単位）、がん免疫治療学（1単位）、がん治療薬学（2単位）、がん治療の先端知識の基礎（2単位） <選択科目> ゲノム情報解析実習（1単位）、造血器腫瘍に関わる医療者育成コース（2単位）（ともに連携校共通インテンシブプログラム）、医療プロフェッショナルリズム・医療安全（1単位）、がんのカウンセリング概論（2単位）、がん看護学（2単位）、がん治療放射線医科学（2単位）、がん診療の基礎知識（2単位）、がん臨床検査学（1単位）、臨床腫瘍学診療実習（2単位）など | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 腫瘍内科専門医（日本臨床腫瘍学会）、臨床遺伝専門医（日本人類遺伝学会）、がん専門看護師（日本看護協会）、がん専門薬剤師（日本医療薬学会）など | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がんの個別化医療はがんゲノム情報の解析の臨床現場での拡大とともに新薬の臨床研究が盛んに行われ、成果が得られつつある。また、生体に備わる免疫機能を賦活化し、がん免疫を亢進させてがん制圧に役立てる療法は一部のがんに劇的な効果を示すことも知られてきた。遺伝子情報や免疫機能をどのように解析して難治性のがんに立ち向かうか、について創薬研究、検査薬の開発への期待は大きい。また、小児がん、血液がん、希少がんなどの難治性がんへの個別化医療へのニーズは高い。このような観点から医師、薬剤師、検査技師などが新薬や新しい検査薬の開発に取り組むに当たっての基礎および実際を学ぶことを教育内容の主眼としているが、その際に看護師、生殖医療に関わる胚培養師、遺伝カウンセラー、さらにビッグデータをもとに研究開発をサポートできるバイオインフォマティクスなど多職種が情報を交換し、共に学び成長できるコースとして設定する特色を有する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 本コースを受講する各院生の出身母体の分野専攻の責任者や指導教員が責任を持って指導を行う。共通項目の学修に関しては、本がんプロを運営する推進委員会委員が連携校の委員と共にWGを編成して対応する。特にゲノム解析とその応用に関しては本学ゲノム医学センター及び遺伝カウンセリング分野、免疫療法に関しては医学部免疫学教室、ビッグデータ解析に関しては本学公衆衛生学専攻のデータサイエンティストなどの全面的な支援を得る体制を構築している。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 医師、薬剤師、臨床検査技師の育成が主眼となるが、その際に看護師、生殖医療胚培養師、遺伝カウンセラー、ビッグデータをもとに研究開発をサポートできるバイオインフォマティクスなどの多様な職種の医療スタッフがそれぞれの立場から、がん患者に最善の個別化医療に関する最善の支援を提供できる専門家として成長し、がん診療病院の臨床現場で指導的に機能を果たすことを期待する。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 <small>※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限</small> | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 10 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の大学院のがんプロ志願者数及び入学ニーズ調査から、毎年確実に2人以上の志願者が見込まれることから、受け入れ目標人数を2人と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 国際医療福祉大学大学院医学研究科、薬学・薬科学研究科、医療福祉学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がんのデータサイエンスに基づく予防医療やがんサバイバーケアを推進する人材育成コース（正規課程：医学研究科公衆衛生学専攻、薬科学研究科、医療福祉学研究科修士課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師（検診医療、腫瘍内科、緩和医療、遺伝医学、公衆衛生学、外科、放射線科、病理診断科など）、看護師・保健師、薬剤師、歯科医、診療放射線技師、臨床検査技師、遺伝カウンセラー、生殖補助医療胚培養師、理学・作業・言語聴覚療法士、診療情報管理士（診療情報アナリスト、データサイエンティスト）、社会福祉士、介護福祉士、公認心理師（臨床心理士）、がん検診事業管理者など | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 2年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | がんの予防医学・検診医療を大きな柱として、ビッグデータを集積してがんの予防医療を開発に意欲を持つ人材が機能的なチームを形成し、EBMに基づく将来への提言とがんの新しい予防施策を提言できるような医療専門職を養成する。さらに本コースではがんサバイバーに対する再発予防の観点から身体的・精神的なケア（生活支援や治療支援）に携わる人材の養成を行う。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 必修科目6単位以上を含む10単位以上を履修し、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <必修科目>予防医学総論（2単位）、がん診療の基礎知識（2単位）、がんのカウンセリング概論（2単位） <選択科目>臨床疫学概論（2単位）、診療情報管理学（2単位）、がんサバイバーケア（2単位）（連携校共通）、がん理学療法学（1単位）、がん治療の先端知識の基礎（2単位）、医療プロフェッショナリズム・医療安全（1単位）、がん治療薬学（2単位）、がん看護学（2単位）、がん治療放射線医科学（2単位）、がん臨床検査学（1単位）、医療福祉データサイエンス（2単位）、生物統計学概論（2単位）など | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 腫瘍内科専門医（日本臨床腫瘍学会）、がん専門看護師（日本看護協会）、認定遺伝カウンセラー（日本遺伝カウンセリング学会）、細胞検査士（日本臨床細胞学会）、緩和ケア専門医（日本緩和医療学会）など | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がん予防医学、がん検診医療を教育内容の中心として、さらにがんサバイバーに対する再発予防の観点から身体的・精神的なケアに携わる人材の教育を行う。医師に加えてがん予防や検診業務にかかわる多彩な業種、公認心理師や社労士などの参加をえてチーム医療人材教育にも注力する。分析に必要な生物統計学やデータサイエンスの知識を実践的に習得することを特色とする。本学関連施設の予防医学センター（ドックセンター）や医療情報管理部、医学研究科公衆衛生学（データサイエンス）、診療情報アナリスト養成分野、臨床心理学分野の支援を得ている。選択科目は多面的な専門職種のエキスパートの多様なニーズに対応した教育内容を設定した。 | | | | | | |
| 指導体制 | 院生の専攻分野の責任者や指導教員が責任を持って指導を行う。共通項目の学修に関しては連携校の委員と共にWGを編成して対応する。データサイエンスや生物統計学専門家、臨床心理士、ケアマネージャーなどの多職種の参加を得て行う。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 医師（遺伝専門医、腫瘍内科医、緩和ケア）のみならず専門看護師、薬剤師、診療放射線技師、臨床検査技師、遺伝カウンセラー、ケアマネージャーや介護福祉士、リハビリ職種、臨床心理士など多様な職種ががん診療病院で指導的役割を担うことを期待する。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限 | 0 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 15 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の大学院のがんプロ志願者数及び大学院医学研究科公衆衛生学専攻及び医療福祉学研究科の入学者実績から、受け入れ目標人数を3人と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 順天堂大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 順天堂大学 がん医療専門人材養成コース①（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科博士課程大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 現在のがん診療は、分子生物学をはじめとした様々な先端的技术により解明された腫瘍生物学を知識基盤とし、その上に様々な治療モダリティ（外科治療、薬物療法、放射線療法、疼痛緩和療法）が細分化され開発されてきた。そのため、本コースは、幅広い腫瘍生物学的知識と集学的治療体系の全容の理解、習得を基本基盤とし、選択必修として行う参加大学間連携プログラムを介して、いまだ臨床現場で解決できていない臨床的課題に意欲的に取り組める人材を養成する。本コースでは、「テーマ①：がん医療の現場で顕在化している課題に対応する人材」の養成を行う。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 本教育プログラム・コースで定める科目について30単位以上を履修すると同時に、参加大学で共同で行う連携プログラムに参加（選択必修）して必要単位を取得し、最終的に学位審査に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <p><必修科目>Unit1(基礎教育)： Basic Course (2単位)、Research Support Course (1単位)、Advanced Course (2単位)；Unit3(レクチャーシリーズ)：大学院特別講義（がんプロ認定講義）5講義を選択（日本語講義3、英語講義2）（0.5単位/講義）、全国がんプロe-Learning 共通講義（0.1単位/コマ）；Unit4(専門コース)：がんプロ特講(4単位)、がんプロ演習(8単位)、がんプロ実験実習(20単位)；Unit5(専門研究)：がんプロ研究指導（論文指導）(20単位)</p> <p><選択必修科目>Unit2(実践教育)：画像病理形態学、腫瘍医学（2単位）、連携校合同プログラム(1単位)、連携校共通で行う「」講義について順天堂の必修科目に該当する講義については単位互換を認める。</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | がん薬物療法専門医、血液専門医、小児血液・がん専門医、造血細胞移植認定医、放射線科治療専門医 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がん診療は治療モダリティの細分化、専門化が進んできており、患者に最適な集学的治療を提供する上では、様々な診療科、職種が参加してそれぞれの専門性を発揮できるチーム医療が重要となってきた。本コースは、チーム医療を行っていく上で共通である幅広い腫瘍生物学的知識と集学的治療体系の理解を基本基盤として、さらに参加大学との連携プログラムによる交流を介して、チーム医療を理解できるものとなっている。参加大学が近隣に存在することから可能な連携プログラムでもあるが、参加者の利便性も考慮して適宜オンラインでの参加も可能とする。 | | | | | | |
| 指導体制 | 【主たる指導スタッフ】加藤俊介（臨床腫瘍学 教授）、高橋和久（呼吸器内科学 教授）、井関雅子（麻酔科学・ペインクリニック講座 教授）、高木辰哉（整形外科・緩和ケアセンター 先任准教授）、鹿間直人（放射線治療学講座 教授）、八尾隆史（人体病理病態学講座 教授）、林 大久生（人体病理病態学講座 准教授）、田部陽子（次世代血液検査医学 教授）、石川敏昭（臨床腫瘍学 准教授）、新井正美（臨床遺伝学研究室 教授）、宿谷威仁（呼吸器内科学 准教授）、渡邊 純一郎（乳腺腫瘍学講座 教授）、安藤美樹（血液内科 教授）、藤村純也（小児科 准教授）、木村利美（薬剤部 部長）、篠原光代（歯科口腔外科 先任准教授） | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 以下の資格を取得し、地域の中核病院やがん拠点病院で中心的役割を担う。がん薬物療法専門医（腫瘍内科専門医）、がん化学療法認定看護師、緩和ケア認定看護師、がん指導薬剤師、がん専門薬剤師、外来がん治療認定薬剤師、がん薬物療法認定薬剤師、血液専門医、小児血液・がん専門医、造血細胞移植認定医 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 25 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 本学大学院医学研究科では年180名の博士課程進学者がおり、大学院生の受け入れ実績やこれまで志願者から、受け入れ目標人数を5人/年と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 順天堂大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 順天堂大学 がん医療専門人材養成コース②（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科博士課程大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 現在のがん診療は、分子生物学をはじめとした様々な先端的技术により解明された腫瘍生物学を知識基盤とし、その上に様々な治療モダリティ（外科治療、薬物療法、放射線療法、疼痛緩和療法）が細分化され開発されてきた。そのため、本コースは、幅広い腫瘍生物学的知識と集学的治療体系の全容の理解、習得を基本基盤とし、選択必修として行う参加大学間連携プログラムを介して、いまだ臨床現場で解決できていない臨床的課題に意欲的に取り組める人材を養成する。本コースでは、「テーマ②：がん予防の推進を行う人材」の養成を行う。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 本教育プログラム・コースで定める科目について30単位以上を履修すると同時に、参加大学で共同で行う連携プログラムに参加（選択必修）して必要単位を取得し、最終的に学位審査に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <p><必修科目>Unit1(基礎教育)：Basic Course (2単位)、Research Support Course (1単位)、Advanced Course (2単位)；Unit3(レクチャーシリーズ)：大学院特別講義(がんプロ認定講義)5講義を選択(日本語講義3、英語講義2)(0.5単位/講義)、全国がんプロe-Learning 共通講義(0.1単位/コマ)；Unit4(専門コース)：がんプロ特講(4単位)、がんプロ演習(8単位)、がんプロ実験実習(20単位)；Unit5(専門研究)：がんプロ研究指導(論文指導)(20単位)</p> <p><選択必修科目>Unit2(実践教育)：画像病理形態学、腫瘍医学(2単位)、連携校合同プログラム(1単位)、連携校合同プログラムで行う講義について順天堂の必修科目に該当する講義については単位互換を認める。</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | がん薬物療法専門医、血液専門医、小児血液・がん専門医、造血細胞移植認定医、放射線科治療専門医 | | | | | | |
| 教育内容の特色等(新規性・独創性等) | がん診療は治療モダリティの細分化、専門化が進んできており、患者に最適な集学的治療を提供する上では、様々な診療科、職種が参加してそれぞれの専門性を発揮できるチーム医療が重要となってきた。本コースは、チーム医療を行っていく上で共通である幅広い腫瘍生物学的知識と集学的治療体系の理解を基本基盤として、さらに参加大学との連携プログラムによる交流を介して、チーム医療を理解できるものとなっている。参加大学が近隣に存在することから可能な連携プログラムでもあるが、参加者の利便性も考慮して適宜オンラインでの参加も可能とする。 | | | | | | |
| 指導体制 | 【主たる指導スタッフ】加藤俊介(臨床腫瘍学 教授)、高橋和久(呼吸器内科学 教授)、井関雅子(麻酔科学・ペインクリニック講座 教授)、高木辰哉(整形外科・緩和ケアセンター 先任准教授)、鹿間直人(放射線治療学講座 教授)、八尾隆史(人体病理病態学講座 教授)、林 大久生(人体病理病態学講座 准教授)、田部陽子(次世代血液検査医学 教授)、石川敏昭(臨床腫瘍学 准教授)、新井正美(臨床遺伝学研究室 教授)、宿谷威仁(呼吸器内科学 准教授)、渡邊 純一郎(乳腺腫瘍学講座 教授)、安藤美樹(血液内科 教授)、藤村純也(小児科 准教授)、木村利美(薬剤部 部長)、篠原光代(歯科口腔外科 先任准教授) | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 以下の資格を取得し、地域の中核病院やがん拠点病院で中心的役割を担う。がん薬物療法専門医、がん化学療法認定看護師、緩和ケア認定看護師、がん指導薬剤師、がん専門薬剤師、外来がん治療認定薬剤師、がん薬物療法認定薬剤師、血液専門医、小児血液・がん専門医、造血細胞移植認定医 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 25 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 本学大学院医学研究科では年180名の博士課程進学者がおり、大学院生の受け入れ実績やこれまで志願者から、受け入れ目標人数を5人/年と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 順天堂大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 順天堂大学 がん医療専門人材養成コース③（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科博士課程大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 現在のがん診療は、分子生物学をはじめとした様々な先端技術により解明された腫瘍生物学を知識基盤とし、その上に様々な治療モダリティ（外科治療、薬物療法、放射線療法、疼痛緩和療法）が細分化され開発されてきた。そのため、本コースは、幅広い腫瘍生物学的知識と集学的治療体系の全容の理解、習得を基本基盤とし、選択必修として行う参加大学間連携プログラムを介して、いまだ臨床現場で解決できていない臨床的課題に意欲的に取り組める人材を養成する。本コースでは、「テーマ③：新たな治療法を開発できる人材」の養成を行う。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 本教育プログラム・コースで定める科目について30単位以上を履修すると同時に、参加大学で共同で行う連携プログラムに参加（選択必修）して必要単位を取得し、最終的に学位審査に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <p><必修科目>Unit1(基礎教育)：Basic Course (2単位)、Research Support Course (1単位)、Advanced Course (2単位)；Unit3(レクチャーシリーズ)：大学院特別講義(がんプロ認定講義)5講義を選択(日本語講義3、英語講義2)(0.5単位/講義)、全国がんプロe-Learning 共通講義(0.1単位/コマ)；Unit4(専門コース)：がんプロ特講(4単位)、がんプロ演習(8単位)、がんプロ実験実習(20単位)；Unit5(専門研究)：がんプロ研究指導(論文指導)(20単位)</p> <p><選択必修科目>Unit2(実践教育)：画像病理形態学、腫瘍医学(2単位)、連携校合同プログラム(1単位)、連携校合同プログラムで行う講義について順天堂の必修科目に該当する講義については単位互換を認める。</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | がん薬物療法専門医、血液専門医、小児血液・がん専門医、造血細胞移植認定医、放射線科治療専門医 | | | | | | |
| 教育内容の特色等(新規性・独創性等) | がん診療は治療モダリティの細分化、専門化が進んできており、患者に最適な集学的治療を提供する上では、様々な診療科、職種が参加してそれぞれの専門性を発揮できるチーム医療が重要となってきた。本コースは、チーム医療を行っていく上で共通である幅広い腫瘍生物学的知識と集学的治療体系の理解を基本基盤として、さらに参加大学との連携プログラムによる交流を介して、チーム医療を理解できるものとなっている。参加大学が近隣に存在することから可能な連携プログラムでもあるが、参加者の利便性も考慮して適宜オンラインでの参加も可能とする。 | | | | | | |
| 指導体制 | <p>【主たる指導スタッフ】加藤俊介(臨床腫瘍学 教授)、高橋和久(呼吸器内科学 教授)、井関雅子(麻酔科学・ペインクリニック講座 教授)、高木辰哉(整形外科・緩和ケアセンター 先任准教授)、鹿間直人(放射線治療学講座 教授)、八尾隆史(人体病理形態学講座 教授)、林 大久生(人体病理形態学講座 准教授)、田部陽子(次世代血液検査医学 教授)、石川敏昭(臨床腫瘍学 准教授)、新井正美(臨床遺伝学研究室 教授)、宿谷威仁(呼吸器内科学 准教授)、渡邊 純一郎(乳腺腫瘍学講座 教授)、安藤美樹(血液内科 教授)、藤村純也(小児科 准教授)、木村利美(薬剤部 部長)、篠原光代(歯科口腔外科 先任准教授)</p> | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 以下の資格を取得し、地域の中核病院やがん拠点病院で中心的役割を担う。がん薬物療法専門医(腫瘍内科専門医)、がん化学療法認定看護師、緩和ケア認定看護師、がん指導薬剤師、がん専門薬剤師、外来がん治療認定薬剤師、がん薬物療法認定薬剤師、血液専門医、小児血液・がん専門医、造血細胞移植認定医 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | 0 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 25 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 本学大学院医学研究科では年180名の博士課程進学者がおり、大学院生の受け入れ実績やこれまで志願者から、受け入れ目標人数を5人/年と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|---|
| 大学名等 | 東海大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がん患者の倫理・社会的問題に対する支援者養成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科（修士課程）大学院生である医師、歯科医師、看護師、薬剤師、社会福祉士、遺伝カウンセラー等 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 2年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | <ul style="list-style-type: none"> ・がんの医療・ケアに関わる倫理的、社会的問題について専門的な知識と技能を習得している。 ・がん患者をめぐる倫理的問題や社会的問題について、多職種が連携して解決を支援するにあたり、その中心となって活躍できる。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 研究指導員の担当する医科学研究ゼミナールIとII（合計8単位）および医科学研究序論特講の2科目と選択科目から20単位以上（境界領域強化科目から12単位）修得し、併せて30単位以上を修得し、修士論文の審査並びに最終試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <必修科目> 医科学研究ゼミナールI（4単位）、医科学研究ゼミナールII（4単位） <選択科目> 生物統計学（1単位）、医学情報学特講（2単位）、病理病態学特講（2単位）、臨床試験の基礎（1単位）、社会医学特講（2単位）、社会医学特講実習（2単位）、精神保健学特講（2単位）、精神保健学特講実習（2単位）、放射線関連法規・医療倫理（2単位）、国際医療学特講（2単位）、国際医療学特講実習（2単位） | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 本コース在籍中に、日本臨床倫理学会臨床倫理認定士と日本臨床倫理学会臨床倫理認定士（上級）の資格取得を目指す。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がんの医療・ケアに関わる倫理的、社会的問題について学び、臨床倫理コンサルタントとして必要なコンピテンシーを獲得する。また、臨床倫理コンサルタントとして臨床倫理支援を実践できるだけでなく、患者・家族支援や社会的資源の活用を通じた実際の問題解決を促進できる技能を身につけることができる。 | | | | | | |
| 指導体制 | 東海大学医学部附属病院において、臨床倫理支援、ソーシャル・ワーキング、患者・家族支援の実務を担当している専門職が直接指導にあたる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | がん拠点病院や地域の中核的病院や医療・ケアチームの一員として、倫理的、社会的問題を解決するためのコンサルテーションや多職種協働の中核を担う人物を養成する。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 1 | 2 | 2 | 2 | 2 | 9 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | がんの医療・ケアに関わる倫理的、社会的問題とその解決を担当できる人材の潜在的な需要は大きいと思われるが、必要な教育を十分に提供できる人数として、年間2名とした。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|---|
| 大学名等 | 東海大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がんゲノム/遺伝看護の高度実践者養成コース(正規課程) | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科(修士課程) 大学院生である看護師、保健師の有資格者 | | | | | | |
| 修業年限(期間) | 2年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | <ul style="list-style-type: none"> ・がんゲノム/遺伝看護の精深な知識をもち、高度実践を遂行できる人材 ・がんゲノム/遺伝看護の知識および技能を実社会へ還元するための実務能力を有し、多職種と連携し、専門役割を果たすことのできる人材 ・がんゲノム/遺伝看護の実践者として、地域・社会で指導的立場を果たすための良識と生命科学に関わる倫理観を有する人材 ・がんゲノム/遺伝看護に関わる研究に精通し、自らの課題を学術的に位置づけ、調査・介入・実験を計画的に実践し、その成果を発表できる人材 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 共通必修科目(看護理論、研究方法概論、看護研究ゼミナール1・2)8単位、共通選択科目(臨床薬理学特論、フィジカルアセスメント特論、臨床病態生理学特論)6単位、4科目(看護倫理、看護管理論、看護教育論、コンサルテーション論)のうち2科目4単位、遺伝看護学領域科目(遺伝看護学特論、遺伝看護援助特論、遺伝基礎科学1・2、遺伝看護援助論A・B)12単位、遺伝看護専門看護師の受験要件に関わる科目(医療倫理学、家族看護学特論、遺伝カウンセリング特論、遺伝看護学実習1・2・3)16単位の計46単位を修得し、修士論文の審査並びに最終試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | 必修科目：看護理論(2単位)、研究方法概論(2単位)、看護研究ゼミナール1・2(4単位)、臨床薬理学特論(2単位)、フィジカルアセスメント特論(2単位)、臨床病態生理学特論(2単位)、遺伝看護学特論(2単位)、遺伝看護援助特論(2単位)、遺伝基礎科学1・2(4単位)、遺伝看護援助論A・B(計4単位)、医療倫理学(2単位)、家族看護学特論(2単位)、遺伝カウンセリング特論(2単位)、遺伝看護学実習1・2・3(10単位) 選択必修科目(2科目4単位)：看護倫理(2単位)、看護管理論(2単位)、看護教育論(2単位)、コンサルテーション論(2単位) | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 修士(看護学)の取得、遺伝看護専門看護師の受験資格 | | | | | | |
| 教育内容の特色等(新規性・独創性等) | 新規性は、国内ではじめて遺伝看護学を標榜した修士課程を基盤とすることにある。その歴史と経験を活かし、時代とともに変化するがんゲノム医療・家族性遺伝性腫瘍への看護実践と、その底流にある普遍的な遺伝看護の学術的理解をサポートする。独自性は、がん分野の医療倫理コンサルテーションに精通した人的資源および機能的システムを備えた学修環境にある。複雑な倫理的課題をもつ事例へのかかわりを通して、効率的に対象や医療上の課題を把握し、課題解決の役割モデルを経験し得る学修環境を提供する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 本学大学院医学研究科と医学部付属病院の遺伝/ゲノム医療、看護分野の研究・教育経験をもつ医師、看護師、保健師の有資格者が指導にあたる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | がん分野をサブスペシャリティとする遺伝看護専門看護師として、がん患者や家族に対する高度実践、コンサルテーション、コーディネーションに携わり、がんと遺伝看護の横断的研究及び教育を担う。一次から三次医療までの病院の他、地域行政、高等教育機関なども視野に入れている。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | 0 | 1 | 2 | 2 | 2 | 2 | 9 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 大学院志願者の実績及び現教育体制にてコース運営が可能な人数として、年間2名と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京歯科大学大学院歯学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 口腔がん治療専門医養成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 歯科医師・大学院歯学研究科博士課程大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 口腔の専門家としての特性を生かしながら、高度口腔がん診療を実践できる人材、口腔がん診療における連携協力体制を構築できる人材、歯科界における口腔がん早期発見の普及に貢献できる人材、口腔がん患者に対する療養生活の質の向上に向けた取り組みを実践できる能力をもつ人材である。がんの医療現場において、口腔がんの最先端の診断・治療を関連各科ならびに多職種と連携してマネジメントできる能力を修得し、将来は学際的な指導的役割を担うことができるリーダーシップを持った歯科医師を養成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 専門医養成コースの履修要件 ・研修コース：東京歯科大学口腔がんセンターおよび市川総合病院医科研修 ・口腔がん、がん口腔支持療法インテンシブコースの修了（12か月） ・国内留学：国立がん研究センター中央病院（6か月） ・地域医療連携事業への参加：口腔がん検診事業、口腔がん早期発見育成事業 ・ポートフォリオの提出：評価シート、担当症例報告、関連セミナーへの参加 ・原著論文1編 または 臨床研究論文3編 | | | | | | |
| 履修科目等 | 大学院共通科目 ・必修科目（主科目）：主科目（講義等）、大学院共通講義Ⅰ（歯科専門分野）、大学院セミナー ・選択科目：主科目以外の科目講義等、大学院セミナー 主科目、選択科目をあわせて必修科目30単位以上を履修し、独創的研究に基づく学位論文を提出し、最終試験に合格すること。 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | ・口腔外科認定医・専門医・指導医（日本口腔外科学会） ・がん治療認定医（歯科口腔外科）（日本がん治療認定医機構） ・口腔がん専門医（日本口腔腫瘍学会） | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がんに関わる医科研修や多職種との連携活動を大学院教育に取り入れ、国内留学も含めたグローバルで高いコミュニケーション能力を有する専門性の高い歯科医師の創出を図ることが本コースの特色である。関連各科との連携による高度口腔がん治療の実践、口腔がんの予防・早期発見に向けた歯科界全体への取り組み、口腔機能ならびに形態の維持と回復による口腔がん患者の生活の質向上に向けた取り組みを推進する能力を有する人材育成を目的としている。これらを勘案し、附属病院としてがん診療連携拠点病院を有する歯科大学ならではの研修プログラムを展開し、がん治療に還元できる歯科医学の知識・技能・態度を涵養するための方略を作成した点が独創的といえる。 | | | | | | |
| 指導体制 | 東京歯科大学市川総合病院は東葛南部のがん診療連携拠点病院であり、がん診療に関わる医師、歯科医師、その他多職種による横断的な指導体制が確立している。また、病院内には口腔がんセンターが設置され、歯科口腔外科医による専門的な指導体制が確立している。さらに国立がん研究センターでの研修協力体制も確立している。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 学位取得後は関連病院に出向し、口腔がん診療およびがん支持療法の専門家としてさらなるキャリアアップを図る。関連病院に出向中は、各種専門資格の取得を目指し、将来この分野の指導的役割を担う歯科医師として臨床、教育、研究を牽引し、さらに海外留学への過程を経て国際的学際活動が行える人材となることを期待する。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月以降 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 25 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 本学大学院の入学数が年間約40名である。このうち口腔外科系に志願する者は約5～10名である。口腔がん治療を実施する関連病院は10施設あり、これらに適正な人材を配置し、さらに発展するためには今後6年間にすくなくとも10名以上を育成する必要があることから、受け入れ目標人数を5名、計25名に設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京歯科大学大学院歯学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 支持療法専門医養成コース/口腔ケア・摂食嚥下リハビリテーション・栄養療法分野（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 歯科医師・大学院歯学研究科博士課程大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 口腔の専門家としての特性を生かし、主として食支援を目的としたがん医療の現場で活躍することのできる人材である。特にがん治療の支持療法として口腔機能の維持と障害の回復のために必要な口腔機能・衛生管理、摂食・嚥下リハビリテーションチームや栄養サポートチームへの参画、そして地域包括ケアシステムの中で終末期医療を含めたがん緩和の分野で連携しリーダーシップをとれる歯科医師を養成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 専門医養成コースの履修要件 ・研修コース：東京歯科大学千葉歯科医療センター摂食嚥下リハビリテーション科、市川総合病院リハビリテーション科および歯科口腔外科研修 ・口腔がん、がん口腔支持療法インテンシブコースの修了（12か月） ・国内留学：国立がん研究センター中央病院（6か月） ・ポートフォリオの提出：評価シート、担当症例報告、関連セミナーへの参加 ・原著論文1編 または 臨床研究論文3編 | | | | | | |
| 履修科目等 | 大学院共通科目 ・必修科目（主科目）：主科目（講義等）、大学院共通講義Ⅰ（歯科専門分野）、大学院セミナー ・選択科目：主科目以外の科目講義等、大学院セミナー 主科目、選択科目をあわせて必修科目30単位以上を履修し、独創的研究に基づく学位論文を提出し、最終試験に合格すること。 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | ・口腔外科学会認定医・専門医（日本口腔外科学会） ・摂食機能療法専門医（日本老年歯科医学会） ・摂食嚥下リハビリテーション認定士（日本摂食嚥下リハビリテーション学会） ・口腔ケア認定士（日本口腔ケア学会） | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がんに関わる医科研修や多職種との連携活動を大学院教育に取り入れ、がん医療の現場で摂食嚥下機能障害をもつ患者、在宅医療、終末期医療におけるがん緩和に携わることのできる専門歯科医師を養成する点が独創的といえる。リハビリテーション科医師、言語聴覚士、理学療法士、作業療法士、栄養療法士を中心とした連携コースワークの設置、訪問歯科診療を通じた食支援の研修を行い、がん治療に還元できる歯科医学の知識・技能・態度を涵養するための方略を作成した点が独創的といえる。 | | | | | | |
| 指導体制 | 東京歯科大学市川総合病院は東葛南部のがん診療連携拠点病院であり、がん診療に関わる診療科による横断的な指導体制が確立している。また、本学千葉歯科医療センターの摂食嚥下リハビリテーション科では訪問歯科診療がおこなわれ、多職種による指導体制が確立している。さらに国立がん研究センターでの研修協力体制も確立している。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 学位取得後は、本学摂食嚥下リハビリテーション科、歯科口腔外科、あるいは病院歯科に勤務し、摂食・嚥下リハビリテーションチームや栄養サポートチームの中で活躍できる専門歯科医師としてさらに研鑽を積む。そして将来はこの分野を牽引する歯科医師として学際的活動が行える人材となることを期待する。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 10 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 本学は2020年に病院歯科医師を養成する専門講座（オーラルメディシン・病院歯科学講座）を設置し、歯学における多職種連携、チーム医療に特化した人材育成を進めている。現在、摂食嚥下リハビリテーションや口腔ケアを専門とする歯科医師の需要が高まっていることから、これまでの進路調査の結果も鑑み、さらに人材増を図るため目標受け入れ人数を2名/年、計10名に設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|---|
| 大学名等 | 東京歯科大学大学院歯学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 顎顔面補綴専門医養成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 歯科医師・大学院歯学研究科博士課程大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 口腔の専門家としての特性を生かしながら、がんによって失われた咀嚼機能、発音機能、嚥下機能、そして審美的な回復を図ることができる歯科医師としての人材である。がんの医療現場において、特に口腔がん・頭頸部がんの治療によって生じる形態・機能障害に対して歯科的技能を応用した高度な顎顔面補綴治療やエビテーゼ治療によって審美と機能の回復を図ることのできるスペシャリストを養成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 専門医養成コースの履修要件 ・研修コース：東京歯科大学水道橋病院，市川総合病院医科および歯科口腔外科研修 ・口腔がん、がん口腔支持療法インテンシブコースの修了（12か月） ・国内留学：国立がん研究センター中央病院（6か月） ・ポートフォリオの提出：評価シート，担当症例報告，関連セミナーへの参加 ・原著論文1編 または 臨床研究論文3編 | | | | | | |
| 履修科目等 | 大学院共通科目 ・必修科目（主科目）：主科目（講義等），大学院共通講義Ⅰ（歯科専門分野），大学院セミナー ・選択科目：主科目以外の科目講義等，大学院セミナー 主科目，選択科目をあわせて必修科目30単位以上を履修し，独創的研究に基づく学位論文を提出し，最終試験に合格すること。 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | ・口腔外科認定医・専門医（日本口腔外科学会） ・補綴認定医・専門医（日本歯科補綴学会） ・顎顔面補綴認定医（日本口腔顎顔面補綴学会） ・摂食機能療法専門医（日本老年歯科医学会） ・摂食嚥下リハビリテーション認定士（日本摂食嚥下リハビリテーション学会） | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | わが国で人材不足が指摘されている顎顔面補綴分野の専門歯科医師を輩出するためのプログラムを作成した点が独創的である。具体的には、口腔がん患者の術後のQOLの向上のために必要な歯科補綴学，歯科インプラント学，顎顔面エビテーゼに関する教育プログラムを設置する。これらを勘案し，附属病院としてがん診療連携拠点病院を有する歯科大学ならではの環境で研修プログラムを展開し，さらに国内留学も含めがん治療に還元できる歯科医学の知識・技能・態度を涵養するための方略を作成した点が特色といえる。 | | | | | | |
| 指導体制 | 東京歯科大学水道橋病院補綴科，口腔がんセンター，市川総合病院歯科・口腔外科における顎補綴治療，歯科インプラント治療の専門的研修を受けることが出来る。また，がん診療に関わる医師，歯科医師，その他多職種による横断的な指導体制が確立している。さらに国立がん研究センターでの研修協力体制も確立している。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 学位取得後は本学補綴科，歯科口腔外科に勤務し，がん患者の顎顔面補綴専門医としてさらに研鑽を積む。そしてこの分野を牽引する歯科医師として，将来は本学の教員，総合病院においてがん治療を含むチーム医療に貢献できる医療従事者として学際的活動が行える人材となることを期待する。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月以降 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 顎顔面補綴専門医（日本顎顔面補綴学会）は千葉県で2名しかおらず，この分野の専門医の育成は急務である。これまでの過去5年間で本学における顎顔面補綴分野に志願した大学院生が3名であり，本コースではさらなる人材増を図る必要があることから，目標受け入れ人数を1名/年，計5名に設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京薬科大学大学院 薬学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 臨床腫瘍専門薬剤師養成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 薬学研究科薬学専攻博士課程臨床薬学コース大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | <p>①がん薬物療法とその支持療法、さらには緩和ケア（非がん疾患の緩和ケアとの比較も含めて）を理解し、薬学手的視点から臨床腫瘍学分野における最新の知見を踏まえたがん薬物療法と緩和ケアを実践できる薬剤師</p> <p>②患者のライフステージ（小児、AYA世代、高齢者など）、療養環境（在宅、緩和ケア病棟、外来、就労など）におけるがん薬物療法について理解し、処方提案や職種間連携体制を構築できる薬剤師</p> <p>③職種横断的な部門の構成員として、がん治療を俯瞰しマネジメントを行うことができる薬剤師</p> | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 各自の専門領域必修科目および下記の追加必修項目を含めて、30単位以上を履修し、学位論文を提出の上、審査、最終試験に合格すること | | | | | | |
| 履修科目等 | <p><必修科目>がん薬物療法の実習（連携大学医学部付属病院における見学実習：ただし社会情勢により実施できない場合は相当内容の講義に変更）2単位を含む所属分野の必修26単位</p> <p><選択科目>薬学基礎、医薬品情報学、薬物療法学（がんの生物システム学、緩和医療概論、緩和医療実践、がん化学療法を含む）から4単位</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 日本医療薬学会に対し「がんに関する講習会・教育セミナー」に認定されるよう申請し、がん専門薬剤師単位認定に必要なクレジット発行の資格を得る予定である。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 学生の指導にあたる教授陣は現在も定期的に関連病院へ定期的に出向し、臨地で薬剤師としてチーム医療に参画している。したがって、本コースを受講する学生は、がん領域における高度な臨床知識を有し、極めて専門性の高い緩和ケア領域での薬物療法に精通した人材として育成される。さらに本プログラムを終了した学生が、臨床腫瘍学領域における適切な薬物療法を普及させるため臨床現場で後進の指導を行うことで、入院から在宅療法に至るシームレスな薬物療法を担える薬剤師を養成できることが期待される。 | | | | | | |
| 指導体制 | 本学大学院の臨床腫瘍薬学分野を中心に、がん専門薬剤師の資格を有する教授を含めた当該分野の指導教員が指導を行う。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | がん専門薬剤師 がん薬物療法認定薬剤師 緩和薬物療法認定薬剤師 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 10 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 薬学研究科薬学専攻博士課程臨床薬学コースに例年所属を志願すると見込める大学院生の人数より、受入れ目標人数を毎年2名と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京薬科大学大学院 薬学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | CAR-T療法・ICIに特化した専門薬剤師養成コース（正規課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 薬学研究科薬学専攻博士課程臨床薬学コース大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 正規課程：4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | ①がん薬物療法の中でも製剤の管理や調製、さらには副作用対策において特異的な知識や技術が要求されるCAR-T療法やICIについて、最新の知見を踏まえた pharmaceutical careを実践できる薬剤師 ②CAR-T療法・ICIに特化した職種間連携体制を構築できる薬剤師 ③職種横断的な部門の構成員として、CAR-T療法・ICI療法を俯瞰しマネジメントを行うことができる薬剤師 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 各自の専門領域必修科目および下記の追加必修項目を含めて、30単位以上を履修し、学位論文を提出の上、審査、最終試験に合格すること | | | | | | |
| 履修科目等 | <p><必修科目>がん薬物療法の実習（連携大学医学部附属病院における見学実習：ただし社会情勢により実施できない場合は相当内容の講義に変更）2単位を含む所属分野の必修26単位</p> <p><選択科目>薬学基礎、医薬品情報学、薬物療法学（がんの生物システム学、緩和医療概論、緩和医療実践、がん化学療法を含む）から4単位</p> <p>なお本コースはWGが分担し、企画・作成したコンテンツを東京医科歯科大学内のサーバーに集約させ相互利用するプログラムである。このコンテンツの活用方法は各連携校の任意とするが、本学はこのコンテンツをもとに本学独自のプログラム・コースとして本コースを開講するものである。</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 日本医療薬学会に対し「がんに関する講習会・教育セミナー」に認定されるよう申請し、がん専門薬剤師単位認定に必要なクレジット発行の資格を得る予定である。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 本領域は限られた医療機関でのみ実施される薬物療法であるため、薬剤師部会メンバーが所属する大学病院において本治療法に精通している医師あるいは薬剤師が主たる講師を務める。したがって、本コースを受講する学生は、がん領域における高度な臨床知識を有し、極めて専門性の高い領域での薬物療法に精通した人材として育成される。さらに本プログラムを終了した学生が、CAR-T療法・ICI療法の適正使用情報を普及させるため臨床現場で後進の指導を行うことで、入院から在宅療法に至るシームレスな薬物療法を担える薬剤師を養成できることが期待される。 | | | | | | |
| 指導体制 | 本学大学院の再生医療分野やPrecision Medicine分野に精通す薬学基礎系の教授や、がん専門薬剤師の資格を有する教授を含めた当該分野の指導教員が指導を行う。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | がん専門薬剤師 がん薬物療法認定薬剤師 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 10 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 薬学研究科薬学専攻博士課程臨床薬学コースに例年所属を志願すると見込める大学院生の人数より、受入れ目標人数を毎年2名と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がんゲノム医療実装化コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科大学院生, 健康マネジメント研究科大学院生, 薬学研究科大学院生, 一般医師, 看護師, 保健師, 助産師, 薬剤師, 臨床検査技師 等 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | がんのクリニカルシーケンスや遺伝性腫瘍のパネル検査を通して, 体細胞変異と生殖細胞系列変異との双方を俯瞰することで, 散発性腫瘍および遺伝性腫瘍におけるがんの発生や進展に関わる遺伝子の役割を理解し, 個別化した治療標的を応用するがん治療および予防に貢献可能な人材を育成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | ・本教育プログラム・コースで定める科目を履修し, 試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <必修科目> 臨床遺伝学センター カンファレンス(30時間以上)、臨床遺伝学センター実習(60時間以上)、腫瘍センター実習(60時間以上)、エキスパートパネルへの参加(24回以上) <選択科目> がん関連診療科での実習(360時間以上) | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 臨床遺伝専門医（日本人類遺伝学会）、遺伝性腫瘍専門医（日本遺伝性腫瘍学会）の研修施設として認定。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がんゲノム医療や遺伝性腫瘍に対する診療を学び、個別化医療およびがん予防を推進できる専門的な人材を育成するため、下記内容を中心に学習する。 ・バリエーションの標記とその意義を理解する ・クリニカルシーケンスによる体細胞変異とともに、潜在する生殖細胞系列変異を理解する ・コンパニオン診断について理解する ・がん家族歴聴取と遺伝性腫瘍のリスク判定を学ぶ ・実際の遺伝カウンセリングに陪席することで遺伝子診療を学ぶ ・がんゲノムエキスパートパネルに参加してがんゲノム医療を学ぶ ・個人情報保護や倫理的な配慮について学ぶ ・チーム医療や多職種連携の重要性を学ぶ | | | | | | |
| 指導体制 | 【主たる指導スタッフ】 小崎健次郎(臨床遺伝専門医)、武田祐子(健康マネジメント研究科)、西原広史(腫瘍センターゲノム医療ユニット)、増田健太(臨床遺伝専門医)、中村康平(臨床遺伝専門医) 【協力指導スタッフ】 浜本康夫(がん薬物療法専門医)、三須久美子(認定遺伝カウンセラー)、植木有紗(臨床遺伝専門医)、後藤優美子(臨床遺伝専門医) これらの遺伝性腫瘍やがんゲノム医療に携わっている多診療科の専門スタッフが連携して指導にあたる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 【ゲノム医療実用化に携わる医療人】 ・遺伝情報に応じた癌の予防医療の実践ができる遺伝の専門医や専門看護師、カウンセラー、その他のメディカルスタッフ 【専門職獲得に向けた準備】 ・臨床遺伝専門医/遺伝性腫瘍専門医の取得準備 ・がん薬物療法専門医の取得準備 ・遺伝専門看護師の取得準備 ・遺伝性腫瘍コーディネーターまたは家族性腫瘍カウンセラーの取得 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和5年9月 | | | | | | |
| 受入目標人数 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 42 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | がんゲノム医療中核拠点病院である慶應義塾大学とゲノム医療連携している病院が現在16ある。それらの病院へスタッフ2名ずつ配置することを目標とし、32名養成する必要がある。過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から考慮し、受入れ目標人数を42人と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 痛みの集学的治療コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | がん医療に携わる医師、看護師、薬剤師、その他の職種（公認心理師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士等） | | | | | | |
| 修業年限（期間） | ベーシック（5日間） アドバンス（1か月以上2か月まで） | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | <ul style="list-style-type: none"> ・がん患者が抱える全人的苦痛を理解した上で、疼痛治療についての専門的な知識・スキルを身に受け、患者・家族が求める支援を行うことができる医療従事者。 ・他職種と円滑なコミュニケーションが図れ、チーム医療を実践できる医療従事者。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 本教育プログラムを全て受講し、レポートを提出すること | | | | | | |
| 履修科目等 | <p>【ベーシック】「緩和医療学概論」「がん疼痛」「緩和医療に必要な対人およびチーム医療での実践能力」の講義、緩和ケアセンターや痛み診療センターの診療への陪席、専門チームとのディスカッション</p> <p>【アドバンス（医師のみ）】①緩和ケアチームに参加し、症例を担当し、アプローチの実際を経験する。②緩和ケアセンターカンファレンス（初診・終診・クラスタカンファレンス等）にてプレゼンテーションを行い、包括的アセスメントを学ぶ。③緩和ケア病棟や在宅緩和ケアを経験し、地域連携について学ぶ。④症例検討などディスカッションを遠し、緩和ケアチームの各職種の役割を学び、連携を深める。</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 医師は、就業の要件を満たせば、日本緩和医療学会の緩和医療認定医の申請要件（緩和ケア専従6か月以上）の実習期間とすることができる。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 緩和医療の普及・啓発は徐々に進んでいるものの、社会のニーズに応えられるだけの専門家の育成は進んでいない。当院は日本でも有数の緩和医療専門医、緩和医療薬物療法認定医を輩出機関である、本コースでは、多職種の専門家による包括的なクルズスの受講と実習により、より専門性を高めることができる。 | | | | | | |
| 指導体制 | 慶應義塾大学病院および連携する緩和ケア病棟等の緩和医療専門医、緩和薬物療法認定薬剤師、専門・認定看護師等が直接指導にあたる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 地域の中核的病院や在宅医療で、医療チームの一員として、がん患者や家族の苦痛の軽減やQOLの向上に視点をおいた緩和医療を提供できる医療従事者を育成する。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 随時 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 8 | 8 | 8 | 8 | 8 | 8 | 48 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の志願者数及び受け入れ体制から、受入れ目標人数を8人／年と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 薬剤師緩和医療実践コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | がん医療に携わる薬剤師 等 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1か月以上2か月まで | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 緩和ケアに関する総合的な知識を有し、疼痛マネジメントなどを含む緩和薬物療法に特化した知識と実践能力を有する薬剤師 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 本教育プログラムを全て受講し、レポートを提出すること | | | | | | |
| 履修科目等 | <p>講義：「緩和医療学総論」「緩和医療に携わる薬剤師に必要な基本的姿勢」「緩和医療に関する知識と実践能力（1.疼痛マネジメント2.消化器症状マネジメント3.呼吸器症状マネジメント4.精神症状マネジメント）」「緩和医療に必要な対人およびチーム医療での実践能力」の講義</p> <p>実習：①緩和ケアチームに参加し、症例を担当し、アプローチの実際を経験する。②緩和ケアセンターカンファレンスにてプレゼンテーションを行い、包括的アセスメントを学ぶ。③緩和ケア病棟や在宅緩和ケアを経験し、地域連携について学ぶ。④症例検討などディスカッションを遠し、緩和ケアチームの各職種の役割を学び、連携を深める。</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 日本緩和医療薬学会 緩和医療専門薬剤師研修施設 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 緩和医療の普及・啓発は徐々に進んでいるものの、薬剤師が緩和ケアを専門的に学ぶことができる場は少なく、社会のニーズに応えられるだけの緩和薬物療法認定薬剤師の育成も進んでいない。本コースでは、多職種の専門家による包括的なクルズスの受講と実習により、緩和薬物療法認定薬剤師の取得を目指す薬剤師として必要な知識、技能や態度の習得が可能である。 | | | | | | |
| 指導体制 | 慶應義塾大学病院および連携する緩和ケア病棟等の緩和医療専門医、緩和薬物療法認定薬剤師、専門・認定看護師等が直接指導にあたる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 緩和ケアを必要としている患者や家族に緩和ケアを専門とするチームの一員として早期に関わり、様々な苦痛を取り除くことに積極的に貢献できる緩和医療領域に精通した薬剤師を育成する | | | | | | |
| 受入開始時期 | 随時 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 24 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 2022年の緩和薬物療法認定薬剤師の新規申請者は約90名、東京都の新規合格者は6名で、合格率を考慮すると東京都の申請者は8名程度である。新規申請者の1/2程度の受入れを考え、4名/年と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 小児がんコース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科大学院生、一般医師、後期研修医、看護師、薬剤師、放射線技師 等 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 小児がんにつき生物学的特性、診断、治療から支援まで領域横断的に理解して、総合的小児がん治療に関与できる人材を育成する | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | ・必修科目8単位以上を履修し、臨床実習を修了すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <必修科目> 小児がんセミナー講義（全10単位）、小児がん臨床実習（20時間） <選択科目> 日本小児がん研究グループ（JCCG）報告会、セミナー講義 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 小児血液・がん専門医（日本小児血液・がん学会）、小児がん認定外科医（日本小児血液・がん学会）、小児外科専門医（日本小児外科学会）の研修施設として認定。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 慶應大学の人材、ネットワークを活用し、小児がんの基礎研究、臨床に関する幅広い分野の講師を集めて講演をお願いし、領域横断的な知識を教育するとともに小児がん医療を総合的、俯瞰的に理解できるようにする。 | | | | | | |
| 指導体制 | 各診療領域の専門家により、小児がんの基礎研究、生物学的特性、がんゲノム、診断、治療、臨床試験、支援など、領域横断的な指導を行う。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 都内の小児がん拠点病院もしくは関東・東海・甲信の地域基幹病院に内科系、外科系の小児がんに関する専門医として就任し、総合的な小児がんチーム医療を行う。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和5年9月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 12 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 都内の2つの小児がん拠点病院に小児血液・がん専門医および小児外科専門医を1人ずつ配置することを目標にし、年間で2人養成する。過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度2人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を毎年2人と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|---|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 骨転移診療コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科大学院生、一般医師、後期研修医、看護師、薬剤師 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | <ul style="list-style-type: none"> ・筋骨格系に発生する腫瘍に対する正確な診断や集学的医療の実践を行える能力 ・骨転移に対する正確な診断や集学的医療の実践を行える能力 ・がんロコモティブシンドローム（がんロコモ）の理解と診療の実践を行える能力 ・筋骨格系に発生する腫瘍の術前、術後のリハビリテーションを計画できる能力 ・AYA世代、壮年、高齢者など、各世代の骨軟部腫瘍患者の病状と社会的背景に応じた社会復帰に向けての支援を行う能力 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | ・本教育プログラム・コースで定める科目について、合計400時間以上を履修すること。等 | | | | | | |
| 履修科目等 | <p><必修科目> 整形外科講義・実習、整形外科診療実習</p> <p><カンファレンス> 病理カンファレンス、放射線科カンファレンス、Pediatric Tumor Board、骨転移カンファレンス他</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 日本がん治療認定医機構認定医、日本整形外科学会骨軟部腫瘍認定医、がん専門看護師 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 主に整形外科が診療を担当する骨軟部腫瘍には原発性骨軟部腫瘍と骨転移が存在し、体幹から四肢末梢まであらゆる部位に発生し、腫瘍による症状、あるいは治療に伴い筋骨格系に様々な症状を呈しうる。診断は、画像診断、病理診断が必須であり、放射線科・病理部と連携して行われる。治療は、手術だけにとどまらず、化学療法、放射線治療など科横断的に、集学的に行われる。対象となる患者も小児からいわゆるAYA世代、壮年、高齢者まで非常に幅広く、患者の社会復帰を目的として様々な試みがなされている。筋骨格系に発生する腫瘍というKey wordで、科横断的な様々な取り組みに参加できる、非常に独創的なプログラムになりうる。 | | | | | | |
| 指導体制 | 骨軟部腫瘍の診断・治療の中心的な役割を担う、整形外科での診療実習を中心に、多診療科カンファレンス（放射線診断部・治療部、病理診断部、リハビリテーション科）や、セミナーに参加する。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 骨軟部腫瘍認定医の取得、がん治療認定医機構認定医の取得、各施設での骨転移診療のハブとなる人材 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和5年9月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 6 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 第3期がんプロにおける骨軟部腫瘍インテンシブコースの実績から、現実的な数字として設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | ライフステージ別がんリハビリテーション習得コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師、リハビリテーション専門職（理学療法士・作業療法士・言語聴覚士） | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 3か月 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | がんリハビリテーションに関して、ライフステージごとに異なる知識・スキヤ病期（急性期、回復期、地域生活期）に応じた実践方法を習得することで、本分野における指導的役割を担うリーダーを育成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | ・本コースで定める科目について、7割以上を履修し、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | がんリハビリテーション（総論・各論）講義：8時間、症例検討（発表）：4時間、グループワーク：4時間 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | リハビリテーション科専門医（日本リハビリテーション医学会）の研修施設として認定。 「がん患者リハビリテーション料」、「リンパ浮腫複合的治療料」の算定要件を満たす施設として認定。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | <ul style="list-style-type: none"> ・2016年12月に改定された、がん対策基本法では、第17条に、「がん患者の状況に応じた良質なリハビリテーションの提供が確保されるようにすること」が追加され、国や地方公共団体においても、がんリハビリテーションに関する施策を推進する方針となった。しかしながら、我が国においては、がん専門医療機関においてすら、がんリハビリテーションが十分実施されているとはいえない。 ・第1～3期がんプロにおいても、がんリハビリテーションのコースは、本大学、京都大学、神戸大学のみであり、第4期がんプロにおいて、引き続き、しっかり推進すべき分野であると考えます。 ・本コースでは、がん患者のライフステージや病期別に、がんサバイバーシップケアとしての、がんリハビリテーションの診療と臨床研究を体系的に学べるという点で新規性がある。 ・我が国で数少ないがんリハビリテーションに関するコースとして独創性がある。 | | | | | | |
| 指導体制 | がん医療の質の向上等により、がんサバイバーが増加しつつある中、がんサバイバーに対するケアの推進が喫緊の課題であるが、リハビリテーション診療は、治療と仕事の両立支援、介護予防、終末期の療養生活の維持・向上の観点からも、重要な役割を担う。がんリハビリテーションのエキスパートである指導教授・担当教官が各地域でリーダーとなるリハビリテーション専門職の養成を行う。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 本コース修了後は、所属先施設の地域において、がんリハビリテーションの普及・啓発、教育に関して指導的役割を担う人材となることを期待する。 また、本大学大学院修士や博士課程に進学し、さらに研鑽を積むきっかけとなることも期待している。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和5年10月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 24 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度4人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を4人と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|---|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院薬学研究科 薬学専攻 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がん薬物療法実践コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 社会人薬剤師。本研究科およびグループ内他大学の研究科や学部の学生の受講も可能とする。 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 約3～6カ月間 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | がん臨床の現場において、高度な医療の実践を展開できる人材を養成する。さらに、臨床研究活動も展開し、研究マインドの高いがん専門薬剤師（oncologist pharmacist）の育成も目指す。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | がん専門病院での臨床実習を通じて、高度ながん医療を実践し、実習発表会やルーブリックを用いた到達度評価を行う。 | | | | | | |
| 履修科目等 | 国立がん研究センター中央・東病院、がん研究会有明病院、慶應義塾大学病院等の国内がん専門施設において、薬剤師臨床実習を行う。 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | がん専門薬剤師（日本医療薬学会）、外来がん治療認定薬剤師（日本病院薬剤師会）の既資格取得者には研修単位発行 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がん専門機関で、CAR-T療法、新規抗体医薬（免疫チェックポイント阻害薬、bispecific抗体、ADC製剤を含む）、新規分子標的薬併用療法、ゲノム医療（precision medicineを含む）などを学ぶ。場合によっては研究活動も行い、学会発表や論文公表も目指す。 | | | | | | |
| 指導体制 | 実習先病院のがん専門薬剤師や指導薬剤師が担当し、研究テーマ①「がん医療の現場で顕在化している課題に対応する人材養成」やテーマ③「新たな治療法を開発できる人材の養成」に関わる。さらに余力のある参加者には、テーマ②「がん予防の推進を行う人材養成」にも参加し臨床研究を指導してゆく。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 修了生は、大学病院やがん専門病院、さらに地域基幹病院に就職してがん専門の薬剤師として勤務する。がん専門薬剤師、外来がん治療認定薬剤師の資格獲得を目指す。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 毎年コンスタントな入学生の確保を目指す。新型コロナウイルス感染は収束しておらず、毎年多人数をの入学はあえて求めない。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 国際医療福祉大学大学院医学研究科、薬学・薬科学研究科、医療福祉学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がん医療の現場で顕在化している課題に多職種連携で挑む人材育成コース（インテンシブコース：医学研究科および医療福祉学研究科博士課程、薬学研究科） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師、看護師、保健師、薬剤師、診療放射線技師、臨床検査技師、遺伝カウンセラー、診療情報管理士、理学・作業・言語聴覚療法士、生殖補助医療胚培養師、社会福祉士、介護福祉士、公認心理師（臨床心理士）など | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1または2年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 多職種連携チームを形成し、がん医療現場で顕在化している課題一痛みの治療やケア、がん関連学際領域への対応、遠隔病理診断や地域での放射線治療などに関する対応など、広範囲に対応できる医療専門職人材を養成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 必修科目6単位以上を含む10単位以上を履修し、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <必修科目> がん治療の先端知識の基礎（2単位）、医療プロフェッショナルリズム・医療安全（1単位）、がんのカウンセリング概論（2単位）、がん多職種協働アクティブラーニング実習（1単位） <選択科目> 緩和医療一般（2単位）、がん疼痛へのアプローチ（2単位）、腫瘍循環器学際領域（2単位）、老年腫瘍学際領域（2単位）、腫瘍腎臓病学際領域（2単位） がんサバイバーケア（2単位）（以上連携校共通インテンシブプログラム）、がん治療薬学（2単位）、臨床腫瘍学各論（1単位）、臨床疫学概論（2単位）、診療情報管理学（2単位）、がん診療の基礎知識（2単位）、がん看護学（2単位）、がん治療放射線医科学（2単位）、臨床心理学概論（2単位）、がん臨床検査学（1単位）など | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 腫瘍内科専門医（日本臨床腫瘍学会）、がん専門看護師（日本看護協会）、認定遺伝カウンセラー（日本遺伝カウンセリング学会）、臨床心理士（日本臨床心理士資格認定協会）、緩和ケア専門医（日本緩和医療学会）など | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 従来の専門性に基づいた縦割り教育を廃し、大学院に学ぶ異なる専門領域の学生がクロスオーバーし、さらに連携校の学生と積極的に協働し、がん医療の現場で顕在化している課題に多職種で挑み、患者支援に関わる専門医療職の養成を目指す点に特色を持つ。特に痛みのケア・治療に関しては医師の他に臨床心理士が参加することで、精神的な支援に関して多様なアプローチを実施できる。 | | | | | | |
| 指導体制 | 本コースを受講する各院生の出身母体の分野専攻の責任者および指導教員が責任を持って指導を行う。加えて、共通項目の学修に関しては、本がんプロを運営する推進委員会委員が連携校の委員と共にWGを編成して対応する。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 医師のみならず看護師、薬剤師、PT・OT・ST、診療放射線技師、臨床検査技師、遺伝カウンセラー、ケアマネージャーや介護福祉士、公認心理師など多様な職種の医療スタッフがそれぞれの立場からがん患者に最善の支援を提供できる専門家となり、がん診療病院で指導的役割を担うことを期待され、がん患者、支援者のみならず社会や地域に大きな利益をもたらす。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 15 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の大学院のがんプロ志願者数及び大学院医学研究科公衆衛生学専攻及び医療福祉学研究科の入学者実績から、受け入れ目標人数を3人と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|---|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 国際医療福祉大学大学院医学研究科、薬学・薬科学研究科、医療福祉学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がんのデータサイエンスに基づく予防医療やがんサバイバーケアを推進する人材育成コース（インテンシブコース：医学研究科博士課程、薬学研究科、医療福祉学研究科博士課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師（検診医療、腫瘍内科、緩和医療、遺伝医学、公衆衛生学、外科、放射線科、病理診断科など）、看護師・保健師、薬剤師、歯科医、診療放射線技師、臨床検査技師、遺伝カウンセラー、生殖補助医療胚培養師、理学・作業・言語聴覚療法士、診療情報管理士（診療情報アナリスト、データサイエンティスト）、社会福祉士、介護福祉士、公認心理師（臨床心理士）、がん検診事業管理者など | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1または2年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | がんの予防医学・検診医療を大きな柱として、ビッグデータを集積してがんの予防医療の開発に意欲を持つ者が機能的なチームを形成し、EBMに基づく将来への提言をでき、がんの新しい予防施策を提言できるような医療専門職を養成する。さらに本コースでは、がんサバイバーに対する再発予防の観点から身体的・精神的なケア（生活支援や治療支援）に携わる人材の養成を行う。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 必修科目6単位以上を含む10単位以上を履修し、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <必修科目> 予防医学総論（2単位）、がん診療の基礎知識（2単位）、がんのカウンセリング概論（2単位） <選択科目> 臨床疫学概論（2単位）、診療情報管理学（2単位）、がんサバイバーケア（2単位）（連携校共通）、がん理学療法学（1単位）、がん治療の先端知識の基礎（2単位）、医療プロフェッショナルリズム・医療安全（1単位）、がん治療薬学（2単位）、がん看護学（2単位）、がん治療放射線医科学（2単位）、がん臨床検査学（1単位）、医療福祉データサイエンス（2単位）、生物統計学概論（2単位）など | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 腫瘍内科専門医（日本臨床腫瘍学会）、がん専門看護師（日本看護協会）、認定遺伝カウンセラー（日本遺伝カウンセリング学会）、細胞検査士（日本臨床細胞学会）、緩和ケア専門医（日本緩和医療学会）など | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がん予防医学、がん検診医療を教育内容の中心として、さらにはがんサバイバーに対する再発予防の観点から身体的・精神的なケアに携わる人材の教育を行う。医師のみならずがん予防や検診業務にかかわる多彩な業種、さらに公認心理師や社労士など参加をえてチーム医療人材教育にも力を入れる。分析に必要な生物統計学やデータサイエンスの知識を実践的に身につけることを特色とする。本学関連医療施設の予防医学センター（ドックセンター）や医療情報管理部及び医学研究科公衆衛生学（データサイエンス）、診療情報アナリスト養成分野、臨床心理学分野の支援を得ている。選択科目は多面的な専門職種のエキスパートが設定した受講者の多様なニーズに対応した教育内容を設定した。 | | | | | | |
| 指導体制 | 院生の専攻分野の責任者や指導教員が責任を持って指導を行う。共通項目の学修に関しては連携校の委員と共にWGを編成して対応する。データサイエンスや生物統計学専門家、臨床心理士、ケアマネージャーなどの多職種の参加を得て行う。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 医師（遺伝専門医、腫瘍内科医、緩和ケア）のみならず専門看護師、薬剤師、診療放射線技師、臨床検査技師、遺伝カウンセラー、ケアマネージャーや介護福祉士、リハビリ職種、臨床心理士など多様な職種ががん診療病院で指導的役割を担うことを期待する。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 10 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の大学院のがんプロ志願者数及び大学院医学研究科公衆衛生学専攻及び医療福祉学研究科の入学者実績から、受け入れ目標人数を2人と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 国際医療福祉大学大学院医学研究科、薬学・薬科学研究科、医療福祉学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | がん個別化医療・創薬の推進を目指したゲノム医療やがん免疫療法の開発を担う人材養成コース（インテンシブコース：医学研究科博士課程、薬学研究科、医療福祉学研究科博士課程） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師（腫瘍内科・血液内科、遺伝医学、病理医、免疫学、外科、放射線科等）、看護師、薬剤師、診療放射線技師、臨床検査技師、遺伝カウンセラー等 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1または2年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 特にがんゲノム解析技術やがん免疫療法を大きな柱として、最新の個別化医療・創薬開発の推進に関しての知識と意欲を持ち、がんの個別化診療とくにゲノム医療やがん免疫療法の開発を担う実力を有した医療専門職人材を養成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 必修科目7単位以上を含む10単位以上を履修し、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <必修科目> がん遺伝子解析学（1単位）、臨床腫瘍学各論（1単位）、がん免疫治療学（1単位）、がん治療薬学（2単位）、がん治療の先端知識の基礎（2単位） <選択科目> ゲノム情報解析実習（1単位）、造血器腫瘍に関わる医療者育成コース（2単位）（ともに連携校共通インテンシブプログラム）、医療プロフェッショナルリズム・医療安全（1単位）、がんのカウンセリング概論（2単位）、がん看護学（2単位）、がん治療放射線医科学（2単位）、がん診療の基礎知識（2単位）、がん臨床検査学（1単位）、臨床腫瘍学診療実習（2単位）など | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 腫瘍内科専門医（日本臨床腫瘍学会）、臨床遺伝専門医（日本人類遺伝学会）、がん専門看護師（日本看護協会）、がん専門薬剤師（日本医療薬学会）など | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がんの個別化医療はがんゲノム情報の解析の臨床現場での拡大とともに新薬の臨床研究が盛んに行われ、成果が得られつつある。また、生体に備わる免疫機能を賦活化し、がん免疫を亢進させてがん制圧に役立てる療法は一部のがんに劇的な効果を示すことも知られてきた。遺伝子情報や免疫機能をどのように解析して難治性のがんに立ち向かうか、について創薬研究、検査薬の開発への期待は大きい。また、小児がん、血液がん、希少がんなどの難治性がんへの個別化医療へのニーズは高い。このような観点から医師、薬剤師、検査技師などが新薬や新しい検査薬の開発に取り組むに当たっての基礎および実際を学ぶことを教育内容の主眼としているが、その際に看護師、生殖医療に関わる胚培養師、遺伝カウンセラー、さらにビッグデータをもとに研究開発をサポートできるバイオインフォマティシャンなど多職種が情報を交換し、共に学び成長できるコースとして設定する特色を有する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 本コースを受講する各院生の出身母体の分野専攻の責任者や指導教員が責任を持って指導を行う。共通項目の学修に関しては、本がんプロを運営する推進委員会委員が連携校の委員と共にWGを編成して対応する。特にゲノム解析とその応用に関しては本学ゲノム医学センター及び遺伝カウンセリング分野、免疫療法に関しては医学部免疫学教室、ビッグデータ解析に関しては本学公衆衛生学専攻のデータサイエンティストなどの全面的な支援を得る体制を構築している。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 医師、薬剤師、臨床検査技師の育成が主眼となるが、その際に看護師、生殖医療胚培養師、遺伝カウンセラー、ビッグデータをもとに研究開発をサポートできるバイオインフォマティシャンなどの多様な職種の医療スタッフがそれぞれの立場から、がん患者に最善の個別化医療に関する最善の支援を提供できる専門家として成長し、がん診療病院の臨床現場で指導的に機能を果たすことを期待する。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限 | 0 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 15 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の大学院のがんプロ志願者数及び入学ニーズ調査から、毎年確実に3人以上の志願者が見込まれることから、受け入れ目標人数を3人と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京薬科大学大学院 薬学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 臨床腫瘍専門薬剤師養成コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 課程外の薬剤師 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | インテンシブコース：1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | <p>①がん薬物療法とその支持療法、さらには緩和ケア（非がん疾患の緩和ケアとの比較も含めて）を理解し、薬学手的視点から臨床腫瘍学分野における最新の知見を踏まえたがん薬物療法と緩和ケアを実践できる薬剤師</p> <p>②患者のライフステージ（小児、AYA世代、高齢者など）、療養環境（在宅、緩和ケア病棟、外来、就労など）におけるがん薬物療法について理解し、処方提案や職種間連携体制を構築できる薬剤師</p> <p>③職種横断的な部門の構成員として、がん治療を俯瞰しマネジメントを行うことができる薬剤師</p> | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 年12コマ中8コマ以上を履修し、試験に合格した者に修了証書を発行する。 | | | | | | |
| 履修科目等 | 臨床腫瘍薬学特論 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 日本医療薬学会に対し「がんに関する講習会・教育セミナー」に認定されるよう申請し、がん専門薬剤師単位認定に必要なクレジット発行の資格を得る予定である。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 学生の指導にあたる教授陣は現在も定期的に関連病院へ定期的に出向し、臨地で薬剤師としてチーム医療に参画している。したがって、本コースを受講する学生は、がん領域における高度な臨床知識を有し、極めて専門性の高い緩和ケア領域での薬物療法に精通した人材として育成される。さらに本プログラムを終了した学生が、臨床腫瘍学領域における適切な薬物療法を普及させるため臨床現場で後進の指導を行うことで、入院から在宅療法に至るシームレスな薬物療法を担える薬剤師を養成できることが期待される。 | | | | | | |
| 指導体制 | 本学大学院の臨床腫瘍薬学分野を中心に、がん専門薬剤師の資格を有する教授を含めた当該分野の指導教員が指導を行う。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | がん専門薬剤師 がん薬物療法認定薬剤師 緩和薬物療法認定薬剤師 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月（正規課程） | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 25 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 3期がんプロ事業においてインテンシブコースに在籍した実績数より、受入れ目標人数を毎年5名と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|-----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通：緩和医療連携コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師、歯科医師、看護師、薬剤師、その他の医療職（公認心理師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士等） | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | <ul style="list-style-type: none"> ・がん患者が抱える全人的苦痛を理解し、緩和医療についての専門的な知識・スキルを身につけ、患者・家族が求める支援を行うことができる医療従事者。 ・他職種の役割を理解し、緩和医療における有機的なチームアプローチを実践できる医療従事者。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 本教育プログラム・コースで定める講義の7割以上を履修し、連携大学での実習に参加の上、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <p><講義> 「緩和医療概論」「疼痛緩和」「疼痛以外の身体症状緩和」「精神・心理的ケア」「家族ケア・グリーフケア」「多職種協働・チーム医療」「緩和的外科治療」「緩和医療における口腔ケア」「在宅緩和医療」等 <実習> 連携大学での実習に参加する（実習内容については選択制） （例）緩和ケアチーム、緩和ケア病棟、ペインクリニック（神経ブロックや鍼灸治療を含む）、骨転移がんサーボード、がんリハビリテーション等</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | <ul style="list-style-type: none"> ・日本緩和医療学会認定医・専門医、ペインクリニック学会専門医 ・認定看護師（緩和ケア、がん性疼痛看護）、専門看護師（がん看護） ・緩和薬物療法認定薬剤師 等 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 本コースの新規性は、多施設・多職種が連携した研修内容となっている点である。がん医療に携わるすべての医療者が基本的緩和ケアを習得することが社会のニーズとして求められているが、まだその普及は十分ではなく、本コースを修了することで身体的苦痛だけでなく精神心理的苦痛、社会的苦痛、スピリチュアルペインに対する対応など、緩和医療を幅広く学ぶことが可能である。 | | | | | | |
| 指導体制 | 緩和医療専門医、ペインクリニック専門医、緩和薬物療法認定薬剤師、専門・認定看護師、公認心理師・臨床心理士等が直接指導にあたる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | がん拠点病院や地域の中核的病院で、医療チームの一員として、がん患者や家族の苦痛の軽減やQOLの向上に視点をおいた緩和医療を提供できる医療従事者を育成する。また将来的には上記専門資格の取得を目指すことが可能である。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 20 | 20 | 20 | 20 | 20 | 100 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 7大学からそれぞれ2～4人/年の志願者が見込まれることから、受入れ目標人数を20人/年と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|-----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通：難治性がん性疼痛に対する集学的アプローチ連携コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師、歯科医師、看護師、薬剤師、その他の医療職（公認心理師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士等） | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | <ul style="list-style-type: none"> ・がん性疼痛の種類やメカニズムを理解し、がん性疼痛を緩和するための各種アプローチに関する専門的な知識・スキルを身につけ、適切に実践できる医療従事者。 ・がん患者が抱える全人的苦痛を適切に評価でき、他の医療従事者とともに疼痛緩和のための有機的なチームアプローチを実践できる医療従事者。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 本教育プログラム・コースで定める講義の7割以上を履修し、連携大学での実習に参加の上、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <p><講義> 「がん性疼痛概論」「がんサバイバーの痛み」「神経ブロック」「緩和と放射線治療」「緩和IVR治療」「骨転移治療」「精神・心理的ケア」「慢性疼痛に対する心理療法」「がん患者に対するリハビリテーション」「鍼灸治療」「多職種協働・チーム医療」等</p> <p><実習> 連携大学での実習に参加する（実習内容については選択制） （例）緩和ケアチーム、緩和ケア病棟、ペインクリニック（神経ブロックや鍼灸治療を含む）、慢性疼痛に対する多職種チーム医療、骨転移キャンサーボード、がんリハビリテーション等</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | <ul style="list-style-type: none"> ・日本緩和医療学会認定医・専門医、ペインクリニック学会専門医 ・認定看護師（緩和ケア、がん性疼痛看護）、専門看護師（がん看護） ・緩和薬物療法認定薬剤師 等 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がん性疼痛は時に難治性で薬物療法だけでは緩和が困難である。本コースでは、難治性がん性疼痛やがんサバイバーの慢性痛を緩和するための、神経ブロック・放射線治療・IVR治療・骨転移治療・心理療法・運動療法・鍼灸治療等の様々なアプローチに関する専門的知識やスキルの習得が可能となっている。また、多施設・多職種が連携した研修内容となっている点が特徴であり、受講者は希望する施設にて、がん診療の現場を見学したり、手技を習得したりすることができる。 | | | | | | |
| 指導体制 | 緩和医療専門医、ペインクリニック専門医、緩和薬物療法認定薬剤師、専門・認定看護師、公認心理師・臨床心理士、理学療法士等が直接指導にあたる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | がん拠点病院や地域の中核的病院において、医療チームの一員として、がん患者の苦痛の緩和やQOLの向上に貢献することが期待される。また、将来的には上記専門資格の取得につながることを期待される。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 20 | 20 | 20 | 20 | 20 | 100 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 7大学からそれぞれ2～4人/年の志願者が見込まれることから、受入れ目標人数を20人/年と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通：緩和的放射線治療・密封小線源治療・高精度放射線治療の質の向上と普及を担う人材養成コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師、看護師、薬剤師、診療放射線技師、ソーシャルワーカーなど | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 以下の3分野の人材を養成する。 <ul style="list-style-type: none"> ・緩和的放射線治療の対象患者の複雑で多岐に渡る苦痛に対し、多職種の有機的な連携を介して対処できる人材を養成する。（医師、看護師、薬剤師、等） ・人材不足が顕著な密封小線源治療の充実のため、全国の中核的施設で技術指導が継続して可能な指導の人材を養成する。（医師、医学物理士、放射線技師） ・適切な高精度放射線治療の実施に必要な科学的根拠の把握、放射線治療計画、物理検証を担える人材を養成する。（医師、医学物理士、放射線技師） | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | <ul style="list-style-type: none"> ・必須/選択講義（計5単位）、選択実習（16時間）、論文指導（15単位）を履修し修了とする。実習は最低2施設での履修を必須とする。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <p><必修講義科目>放射線腫瘍学（1単位）、臨床腫瘍学概論（1単位）、画像病理形態学（0.5単位）、核医学治療（0.5単位）</p> <p><選択講義科目>医学物理学総論（1単位）、密封小線源治療講義（1単位）、放射線測定学（1単位）、がんのカウンセリング概論（0.5単位）、がん看護学（0.5単位）、医療統計学（0.5単位）、臨床腫瘍学特論（0.5単位）、がんの疼痛ケア（0.5単位）、臨床心理学（0.5単位）、陽子線治療（0.5単位）、等</p> <p><選択実習科目>密封小線源治療実習・ハンズオン（8時間/施設）、高精度放射線治療実習（8時間/施設）、緩和的放射線治療/チーム医療（ミニワークショップを含む）（8時間/施設）、等</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 放射線治療専門医（日本放射線腫瘍学会）の研修施設として認定されている。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 遠隔講義にて各大学の講義の履修と単位認定を行い、対面実習は各大学の特色ある領域を複数履修する。遠隔地からでも参加しやすいよう移動距離の少ない関東圏の大学間で凝縮した実習を実施し、地域の指導的立場の人材を育成する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 東京医科歯科大学、慶応大学、国際医療福祉大学、東海大学、東京歯科大学、順天堂大学の放射線治療部門が共同で、遠隔講義、対面実習、ミニワークショップを実施する。指導は放射線治療専門医、医学物理士、がん放射線療法看護師が直接行う。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 以下の資格を取得し、地域の中核病院やがん拠点病院で中心的役割を担う。 <ul style="list-style-type: none"> ・医師：放射線治療専門医（日本放射線腫瘍学会） ・看護師：がん放射線療法看護師・緩和ケア看護師（日本看護協会） ・医学物理士：医学物理士認定機構（JBMP） ・診療放射線技師：放射線治療専門放射線技師（RTT） | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 50 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 各連携校の放射線治療領域に入職する医療人の過去の数を参照し、施設毎に年2-3名の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を年10名と設定し計50名を予定する。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通：がん学際領域の医療者養成コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師、歯科医師、看護師、薬剤師、理学療法士など | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | ①学際領域としての腫瘍循環器学の病態と疾病管理を理解し、多職種・他科と連携して適切な医療を提供できる人材 ②学際領域としての腫瘍腎臓病学の病態と疾病管理を理解し、多職種・他科と連携して適切な医療を提供できる人材 ③学際領域としての老年腫瘍学の特性や病態および疾病管理を理解し、高齢者の状況に応じた適切な医療を提供できる人材 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 所定の講義・実習を履修し、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | ①心エコーによる心機能評価 ②バイオマーカーによる心血管合併症評価 ③irAE心筋症 ④Cancer VTE ⑤がん治療における循環器合併症 ⑥腫瘍循環器ガイドラインに基づいた現場での演習 ⑦老年腫瘍学総論 ⑧高齢者機能評価 ⑨多職種チーム ⑩各臓器別の老年腫瘍学 ⑪老年腫瘍学におけるエビデンス・ガイドラインの概説 ⑫老年腫瘍学演習 ⑬がん薬物療法開始前の腎機能評価法 ⑭薬剤性腎障害の定義と評価法 ⑮薬剤性腎障害・高血圧の疫学と病態 ⑯CKD患者に対するがん薬物療法 ⑰薬剤性腎障害への対策 ⑱腫瘍腎臓病学演習 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 腫瘍循環器、腫瘍腎臓病学、老年腫瘍学の専門資格は現在はない。がん専門薬剤師（日本医療薬学会）の研修単位は研修趣旨に合致するものは単位発行を申請する。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がん治療の複雑化や分子標的薬の発展及び高齢化に伴い、癌治療を行う際の心血管合併症・腎障害・高齢者におけるがん治療のマネジメントなど、がん治療における学際領域の知識や経験が必要なケースが急速に増加している。そのため、がん治療に従来携わっていなかった医師、歯科医師、看護師、薬剤師、セラピストなどの医療スタッフががん治療の知識を学ぶ必要性、逆にがん治療従事者が循環器・腎臓・老年医学の知識を学ぶ必要性の双方が増している。本コースは連携大学が協力し横断的にがん治療に伴う学際領域の知識を集約して学ぶ機会を提供することにより、がん治療に特有の心血管合併症・腎障害及び老年医学の知識を体系的に学習できることを特徴とする。実習も取り入れることで知識に留まらず、実践的な診療マネジメントも学習することができるため、エビデンスが不足している本領域においても実践的な学習を行うことができる。現場で診療に従事している医療者を対象とするため、e-learningを用いることで受講者の利便性に配慮した受講環境を整備する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 東京医科歯科大学および連携大学の循環器専門医・腎臓専門医・老年内科専門医が中心となり、学内外の各分野の専門家による講義・実習による指導を行う。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 大学病院、地域の中核病院、がん拠点病院にて多職種と連携して、領域横断的にがん患者のアセスメントとプランを立案・支援でき、最適な医療とケアが提供できる専門職。腫瘍循環器、腫瘍腎臓病学、老年腫瘍学などのがん学際領域の発展に貢献できる人材。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和5年9月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 5 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 55 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 連携校全体の学際領域に触れることがもとめられる医療従事者が10人以上見込まれるため、受入れ目標人数を10人/年と設定。初年度は9月開始であり5人とした。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通：がん薬物療法専門医療人養成コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師、看護師、薬剤師、理学療法士 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 分子生物学を基盤とした臨床研究の発展により、様々な新規分子標的薬剤、免疫チェックポイント阻害剤が登場し、臨床現場で使用されるようになってきている。これら薬剤の適応や副作用マネージメントは診療科横断的になってきており、質の高い安全な治療の提供のためには、薬物療法に精通しかつ多職種間チーム医療を実践できるリーダーが求められている。本プログラムでは、関連大学間連携カンファレンスを介して、実際の症例を通じて経験を積み、適応力の高い高い専門的医療人を育てることを目標としている。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 所定の講義・実習を履修し、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | 講義：下記講義を知識基盤として習得する。 1. 臨床腫瘍学総論（必修：腫瘍生物学、分子標的とがん治療、腫瘍免疫、サイコオンコロジー、効果判定基準、臨床試験（第一相試験、第二相試験、第三相試験）、オンコロジーエマージェンシー、ゲノム医療） 2. 薬物療法総論（必修：殺細胞性抗がん剤、分子標的薬、ホルモン療法、免疫チェックポイント阻害剤、副作用と支持療法） 3. 臨床腫瘍学各論（選択必修：造血器、呼吸器、消化管、乳房を含め6領域以上） 4. 臨床腫瘍学演習（必修：症例検討会における症例提示、討論への参加（各大学で持ち回りで実施）） | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | がん薬物療法専門医（腫瘍内科専門医）（日本臨床腫瘍学会）、がん化学療法認定看護師、緩和ケア認定看護師（日本看護協会）、がん指導薬剤師（日本医療薬学会）、がん専門薬剤師（日本医療薬学会）、外来がん治療認定薬剤師（日本臨床腫瘍薬学会）、がん薬物療法認定薬剤師（日本病院薬剤師会）などの研修施設として認定されている。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 連携大学間で行うプログラムは様々な職種の参加を予定しており、高度に細分化・専門化したがん診療に必要なチーム医療を疑似的に体験でき、幅広く症例知見を得ることができる。 | | | | | | |
| 指導体制 | 各参加大学やがんプロe-learningなどを活用して臨床腫瘍学の知識基盤を強化し、さらに参加各大学の輪番制による症例検討会で実践能力をあげる指導を行っている。 【主たる指導スタッフ】 加藤俊介（順天堂大学 臨床腫瘍学 教授） 浜本康夫（慶應義塾大学 腫瘍センター 准教授）、樋口 肇（国際医療福祉大学臨床腫瘍学 主任教授）、宿谷威仁（順天堂大学 呼吸器内科学 准教授）、末永光邦（東京医科歯科大学 臨床腫瘍科 准教授）、加納嘉人（東京医科歯科大学 臨床腫瘍科 講師） | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 本コースと関連する専門資格（がん薬物療法専門医（腫瘍内科専門医）、がん化学療法認定看護師、緩和ケア認定看護師、がん指導薬剤師、がん専門薬剤師、外来がん治療認定薬剤師、がん薬物療法認定薬剤師など）を取得し、がん薬物療法の専門医療人として大学病院、地域の中核病院、がん拠点病院にて多職種によるチーム医療のリーダーあるいはその一員として活躍できる医療者。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 12 | 12 | 12 | 12 | 12 | 60 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 医師以外の参加と各大学からの参加者を2-3名/年と考え、12人/年と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通：造血器腫瘍専門医養成コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師（血液内科、小児科） | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | ①造血器腫瘍の正確な診断を迅速にできる能力を有する人材 ②造血器腫瘍の予後、治療法の決定に必要なゲノム異常を含めた最先端の検査と技術を活用できる人材 ③造血器腫瘍に対する化学療法、分子標的療法、造血幹細胞移植を含めた細胞療法による集学的な治療が実践できる人材 ④合併症の管理およびサイバーの適切なフォローアップ管理ができる人材 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 所定の講義・実習科目4単位以上を履修し、試験に合格して修了する。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <必修科目> 造血器腫瘍（1単位）＋造血器腫瘍実践実習（2単位） <選択科目> がん生物学・解剖学・病理学（1単位）、がん化学療法特論（1単位）、臨床腫瘍学（1単位）、腫瘍放射線治療学特論（1単位）、放射線診断学・核医学特論（1単位）、緩和ケア・緩和医療学（1単位）、口腔がん・がん口腔支持療法（1単位）から1単位以上 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 血液専門医（日本血液学会）、小児血液・がん専門医（日本小児血液・がん学会）、造血細胞移植認定医（日本造血・免疫細胞療法学会）の研修施設として認定。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 白血病・悪性リンパ腫を含めた造血器腫瘍は固形がんに比べるとその頻度は低い（最も多い悪性リンパ腫で全がん腫の3-4%程度）。しかし、その治療は殺細胞性治療薬に続き、最も早くから分子標的薬、造血幹細胞移植などが導入され、予後を大幅に改善している。また遺伝子異常、ゲノム解析の情報も蓄積して、固形がんが遅れているが、その臨床応用が開始されている。本プログラムは診断および予後予測・治療法決定に必要な白血病幹細胞の生理学、遺伝子異常・ゲノム解析、各種診断手法、病理形態学を学内外の専門家から指導し、がん化学療法、分子標的薬、造血幹細胞移植およびCAR-T療法に関して合併症の管理を含めた指導を行う。特に近く導入される遺伝子パネル検査を適切に活用できる能力の習得を目指す。また造血器腫瘍治療に密に関連する放射線治療、緩和医療学、腫瘍循環器病学などの最先端の知識を習得し、診断から治療、その後のフォローアップまで一貫した管理ができる専門医を育成する。可能な範囲で遠隔講義やe-learningを用いることで受講者の利便性に配慮した受講環境を整備する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 東京医科歯科大学病院および連携する施設の血液内科および小児科に属する血液専門医・指導医、造血細胞移植認定医が中心となり、病理専門医、臨床検査専門医、放射線治療専門医、がん薬物療法専門医、歯科医師、基礎研究者等と連携して指導にあたる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 血液専門医、小児血液・がん専門医、造血細胞移植認定医等の資格を取得し、地域の中核病院やがん拠点病院にて造血器腫瘍の専門的医療を提供できる医療者。造血器腫瘍以外のがん腫に合併する血液異常を適切に診断し、他科専門医と連携して管理できる医療者。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 15 | 15 | 15 | 15 | 15 | 75 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 連携校全体の過去の造血器腫瘍診療科に入学する医師が15人以上見込まれるため、受入れ目標人数を15人/年と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|-----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通:造血器腫瘍に携わる医療者養成コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師（血液内科・小児科以外）、歯科医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、造血細胞移植コーディネーター、歯科衛生士、理学療法士など | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | ①造血器腫瘍の病態と治療原理を理解し、多職種と連携して適切な医療を提供できる人材 ②造血器腫瘍に対する治療の有害事象・合併症の病態、頻度、管理法の知識を有し、それを現場で応用できる人材 ③治療および治療後の身体的・精神的サポート、晩期合併症管理と長期フォローアップ、社会・就労支援まで全人的医療が提供できる人材 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 所定の講義・実習を履修し、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | ①造血器腫瘍の診断・病態、②骨髄性腫瘍、③リンパ性腫瘍、④化学療法・分子標的薬、⑤細胞療法（造血幹細胞移植、CAR-T療法）、⑥有害事象・合併症対策、⑦精神的サポート、⑧身体的サポート、⑨口腔支持療法・栄養管理、⑩晩期合併症（含む妊孕性）・長期フォローアップ | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 特定の資格との認定施設としての連携はない。ただし、コース修了後、がん専門薬剤師（日本医療薬学会）、臨床栄養代謝専門療法士（がん専門療法士：日本臨床栄養代謝学会）取得は想定される。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | 造血器腫瘍の治療は殺細胞性治療薬に加えて、早期から分子標的薬、造血幹細胞移植などが導入され、予後が大幅に改善している。その診療においてに多職種連携が不可欠で、血液内科・小児科の造血器腫瘍専門医以外の医師、歯科医師、看護師、薬剤師など多職種が連携して、チーム医療を実践することで患者は質の高い治療の恩恵を享受することができる。本コースは造血器腫瘍の診断・病態、疾患各論、新規治療法を含めた治療法の実際、有害事象・合併症対策に加えて、身体的・精神的サポート、口腔支持療法、二次がんや妊孕性などの晩期合併症、社会復帰や就労支援を含めた長期フォローアップまでを網羅的に学ぶことが特徴である。実習も取り入れることで知識に留まらず、自身の専門性を最大限に発揮し、全人的な医療が提供できる人材を育成する。現場で診療に従事している医療者を対象とするため、可能な範囲で遠隔講義やe-learningを用いることで受講者の利便性に配慮した受講環境を整備する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 東京医科歯科大学および連携大学の血液専門医が中心となり、学内外の各分野の専門家による講義・実習による指導を行う。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 大学病院、地域の中核病院、がん拠点病院にて多職種と連携して、個々の造血器腫瘍患者に寄り添い、自身の専門職のスキルを最大限に発揮して高いレベルの医療とケアが提供できる専門職。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和5年9月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 10 | 20 | 20 | 20 | 20 | 20 | 110 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 連携校全体の造血器腫瘍診療科の多職種の受講が20人以上見込まれるため、受入れ目標人数を20人/年と設定。初年度は年度途中の開講となるため10人/年を目標とした。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|-----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通：口腔がん・がん口腔支持療法に携わる医療者養成コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 歯科医師、歯科衛生士、医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、言語療法士など | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | ①口腔がんをはじめとする口腔疾患の病態と治療を理解し、多職種と連携して適切な医療を提供できる人材 ②がん治療に対する口腔の有害事象・合併症の病態等の知識を有し、多職種と連携して、適切な、がん口腔支持療法を提供できる人材 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 所定の講義・実習を履修し、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | ①口腔マネージメント総論、・口腔の特殊性（機能、生理、解剖：歯の名称、顎機能（そしゃく）、唾液、嚥下、発音）、・全身から生じる様々な口腔内症状、・う蝕、歯周病をはじめとした歯科治療および周術期口腔健康管理の理解、 ②口腔マネージメント各論、・口腔がんの特徴、がん患者の周術期口腔健康管理とその実際（外科療法、放射線療法、がん薬物療法）、・嚥下リハビリテーションの手技と理解、・栄養療法の基礎と口腔管理（NSTでの役割、口腔ケアと食べるための口づくり）、・口腔がん術後患者の生活の質向上にむけた取り組み（リハビリテーションと顎補綴、顎顔面インプラント）、・終末期患者に対する歯科的介绍、・症例検討会 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | <ul style="list-style-type: none"> ・日本口腔外科学会認定医・専門医・指導医の研修施設認定 ・口腔がん専門医（日本口腔腫瘍学会）の研修施設認定 ・がん治療認定医（口腔外科）（日本がん治療認定医機構）の研修施設認定 ・摂食機能療法専門医（日本老年歯科医学会） ・摂食嚥下リハビリテーション認定士（日本摂食嚥下リハビリテーション学会） ・口腔ケア認定師（日本口腔ケア学会） ・医科歯科連携、口腔機能管理 認定歯科衛生士（日本歯科衛生士会）の研修施設認定 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がん口腔支持療法は、近年ますますその重要性が認識されてきているが、多職種と連携してそれを適切に実践できる人材の教育プログラムは存在していなかった。本プログラムは、歯科医学の基本に対する多職種の共通理解をもとに、相互の連携を意識し、症例検討会をも含め、総合的に学習できる構成となっている。がん医療の分野に多職種を対象とした、歯科医学の教育カリキュラムを導入した点が本プログラムの特色といえる。 | | | | | | |
| 指導体制 | 東京医科歯科大学および連携大学の医師、歯科医師、歯科衛生士が中心となり、学内外の各分野の専門家による講義・実習による指導を多職種を対象として行う。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | がん口腔支持療法を必要とするがん治療施設において先進的な主導を果たすことのできる歯科、口腔外科等。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 20 | 20 | 20 | 20 | 20 | 100 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 東京医科歯科大学および連携大学において、がん治療に携わる歯科医師、歯科衛生士は例年合計10名程度大学院に入学あるいは病院に入職する。さらに本インテンシブコースを受講する多職種が10名（医師1名、看護師4名、管理栄養士2名、言語療法士2名、薬剤師1名）程度は見込まれるため。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通：医療ビッグデータに基づくがんの予後予測と予防コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | がん医療に携わる医師、歯科医師、看護師、薬剤師、その他の職種 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 4ヶ月（週1回） | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 機械学習、深層学習、基盤モデルなどのAI技術を用いてビッグデータを解析し、疾患の予後を予測して予防に繋げる「AIメディカルデータサイエンス」という新しい研究領域が生まれ、これまでに521のAI診断が米国FDAによって承認されている。 本プログラムでは、がんの予後予測に関するAI診断の原理を理解して適切に活用するとともに、新たながんAI診断を開発できる人材を養成する。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 本教育プログラムを全て受講し、レポートを提出すること | | | | | | |
| 履修科目等 | 以下の内容の講義を実施する（90分X10回） ①医療DX（診療プロセスのデジタル化） ②予後予測モデル構築法 ③機械学習（決定木）を用いたがんの予後予測 ④深層学習（ニューラルネットワーク）を用いたがんの予後予測 ⑤基盤モデル（トランスフォーマー）を用いたがんの予後予測 ⑥ドメイン知識とAIモデルの統合による予防の考え方 ⑦がん基盤モデル実現に向けた新たな解析法 ⑧プログラミングの学習とモデルデータを用いた解析 ⑨データベース技術（連合学習、SWARM学習など） *⑧では自分自身でAIデータ解析を実施するための自主学習法を指導する | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | AI診断に関する専門医制度は現在はない。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | <ul style="list-style-type: none"> ・2018年度から国内では医学・工学・薬学・ゲノム研究などの急速な進歩に伴って高度化・複雑化・先進化・多様化している医療分野において、AI・IoT・ビッグデータ技術を駆使した「AIホスピタルシステム」によって、質の確保、医療者への負担軽減の実現、国際的競争力の向上、等を目指す研究がスタートしている。本プログラムでは、これまでの国内外の「AI医療」研究の進展をふまえて、近い将来実現が期待される高精度の予測に基づくがんの予防医療を開発できる人材を養成する。そのために次の5つの特徴を持った教育を実施する。 ・これまであまり焦点のあたっていなかった非画像検査データなどを用いた予測 ・Visual transformerなどの最新の画像診断技術 ・従来のゲノム創薬、ゲノム診断とAI診断の統合によって予防医療を実現する方法 ・次世代のAIメディカルデータサイエンスの考え方 ・最新のデータベース技術やプログラミング | | | | | | |
| 指導体制 | 生命医科学と情報科学の二つの専門性を持った教官を中心に、これまで医療DX、データベース構築、ゲノム創薬、ゲノム診断に取り組んできた教官が教育する。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | AI診断の研究と開発ならびに病院（大学病院、地域の中核病院、がん拠点病院等）へのAI診断の実装などの業務を担う | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 50 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 多職種の参加が想定され、各連携校の本領域に関わる医療者を1-3名/年と考え、10人/年と設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通：がん予防を推進する遺伝医療職育成コース(インテンシブコース) | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師(臨床遺伝専門医), 看護師(遺伝看護専門看護師), 認定遺伝カウンセラー, の有資格者および当該養成課程の大学院生 | | | | | | |
| 修業年限(期間) | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | ①がん発症の遺伝的リスクを的確に評価できる人材 ②がん発症の遺伝的ハイリスクにある患者やその家族に, 予防医療を提供できる人材 ③がん発症の遺伝的ハイリスクにある患者やその家族における心理的課題, 倫理的課題に対応できる人材 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | ・必修科目6単位, 選択必修科目3単位以上を履修し, 試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <必修科目> 予防医学概論(2単位) :がん検診と全国がん登録, 健診検査総論, 臓器別検診各論, 保健指導, 口腔保健, ゲノム医療と検診 がん予防カウンセリング(2単位) :精神腫瘍学, ライフステージ別がんカウンセリング, チームカウンセリング, 遺伝性腫瘍カウンセリング, 健康行動理論, 行動変容支援, 遺伝性腫瘍発症前診断に関するELSI がん予防カウンセリング実習(2単位) :他職種連携ロールプレイ, 連携施設遺伝診療部門および検診施設における遺伝性腫瘍リスク管理/遺伝カウンセリング/保健指導 <選択必修科目> がん診療の基礎知識(2単位), 臨床腫瘍学各論(1単位), 臨床心理学概論(2単位) | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 臨床遺伝専門医, 専門看護師(遺伝看護, がん看護), 認定遺伝カウンセラーの研修施設/養成課程として認定 | | | | | | |
| 教育内容の特色等(新規性・独創性等) | がんゲノムプロファイリングやコンパニオン遺伝子関連検査の普及により, がん医療を契機として遺伝性腫瘍の診断がなされる機会が増加している。遺伝性腫瘍は, 特定の臓器・部位におけるがん発症リスクが高くなる特徴があり, 対策型検診ではなくハイリスク臓器・部位に特化した精査を実施することにより, 効果的ながん予防が期待できる。特に, 遺伝性腫瘍と遺伝学的に診断された担癌患者の血縁者においては, 遺伝学的検査による発症前診断が可能であり, 遺伝学的診断に基づいたがん予防医療の高い効果が期待される。一方で, 遺伝性腫瘍と診断されることにもつながり, 遺伝性疾患特有の心理的, 社会的, 倫理的な課題が生じることにもつながり, 遺伝医療専門職による専門的対応が必要である。本コースでは, 遺伝医療専門職のがん医療, 予防医療の知識・技能を向上し, がん予防医療に強い遺伝医療専門職を養成することを目的とする。 | | | | | | |
| 指導体制 | 本学及び連携施設の臨床遺伝専門医指導医, 認定遺伝カウンセラー養成課程教員, 遺伝看護専門看護師養成課程教員と, 予防医療を専門とする医師・保健師が連携して指導にあたる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | 本コース修了者は, 地域の中核拠点病院やがん拠点病院において, がん医療から遺伝医療・予防医療への橋渡しと, がん遺伝医療・予防医療を実践することが期待される。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | 0 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 50 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 連携大学における認定遺伝カウンセラー養成コース, 遺伝看護専門看護師養成コースの志願者と, 臨床遺伝専門医の専攻医の見込みと, 実習の受け入れ可能人数から, 10人/年と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|-----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通：がんサバイバーを支える多職種医療人養成コース（インテンシブコース） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師、歯科医師、看護職者、薬剤師、リハビリテーションセラピスト、医療ソーシャルワーカー、ケアマネジャー、管理栄養士等医療従事者、大学院生 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | ①がんサバイバー・家族の身体的問題を理解し、多職種と連携し適切なケアが提供出来る人材。②がんサバイバー・家族の心理的問題を理解し、多職種と連携し適切なケアが提供できる人材。③がんサバイバー・家族の社会的問題を理解し、多職種と連携し適切なケアが提供できる人材。④がんサバイバー・家族が、がんを自己の問題として捉え、がんと共に生活すること、がんの再発を予防する生活を再構築する支援できる人材。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 所定の講義、実習を履修し、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | ①がんサバイバーシップ、②がん治療とお金、③意思決定支援、④がんと治療に活用できる社会的支援・制度、⑤小児がんサバイバー・家族への支援、⑥AYA世代のがんサバイバー・家族への支援（妊孕性、がんサバイバーの親をもつ子どもへの支援）、⑦高齢期のがんサバイバー・家族への支援（フレイル予防、サルコペニア予防、認知機能低下予防・認知症がある高齢者に対する社会的孤立予防等）、⑧がんサバイバー・家族へのメンタルケア（自殺予防、がんにより発症したうつ病、グリーフケア、サポートケア）、⑨精神疾患をもつがんサバイバーへの支援、⑩がん治療と仕事の両立支援、⑪地域連携、⑫アピランスキア、⑬がんの再発予防（食事、運動、受療行動等のセルフマネジメント）、⑭障がい（視覚障がい、聴覚障がい、知的障害等）をもつがんサバイバー・家族への支援等の内容を提供する。 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | がん看護専門看護師・がんに関連する認定看護師、がん専門薬剤師、がん病態栄養専門管理栄養士、がん専門相談員等 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | がんはどの年代においても発症する可能性がある。またがんとともに過ごす期間も延長している。がんサバイバー・家族に関わる医療従事者は発達段階や発達課題を考慮し、個別性のあるケアの必要性を認識している。しかし、個別性のあるきめ細やかなケアの提供は難しい。本コースではがんサバイバー・家族へのケアをする際に必要な基礎的知識を様々な専門職種から学修することができる。またオンライン授業やe-learning等の学修環境を整備することにより受講生が履修しやすい環境を整備する。連携校にはがんに関する様々な専門職種があり、受講生に対し最新知見の情報を提供できる。さらに多職種が共に学ぶことにより職種の考えを共有出来ることは、現場における多職種連携を学べる点で受講生にとって大きなメリットとなる。 | | | | | | |
| 指導体制 | 連携大学の医師、看護職者、薬剤師、リハビリテーションセラピスト、医療ソーシャルワーカー、ケアマネジャー、管理栄養士などが学内外の専門職職種が連携して講義、実習等を提供する。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | がん診療に携わる様々な施設・部門・部署において自己の専門的スキルを発揮したケアを提供可能な専門職になることができる。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 30 | 30 | 30 | 30 | 30 | 150 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 連携校においてがんに関連する専門職の人数と実習の受け入れ人数上限を踏まえ、目標人数を30人/年として設定した。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|-----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通:個別化医療人養成コース (インテンシブコース) | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医師、歯科医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、診療放射線技師、保健師、助産師、遺伝カウンセラー、診療情報管理士、生殖補助医療胚培養士、臨床心理士、社会福祉士、その他医療職 | | | | | | |
| 修業年限 (期間) | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | <ul style="list-style-type: none"> ・がん個別化医療の現状の問題点を理解し、創薬等を通して対応を行うことができる医療者の養成を目指す。 ・多職種からなるチームを構成し、それぞれの専門性を活かし、個別化医療に貢献できる医療者の養成を目指す。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | <ul style="list-style-type: none"> ・本コースで定める科目について、オンライン授業、シンポジウム、セミナー、オンライン症例検討会 (エキスパートパネル)、ハンズオン実習等を履修し、試験やレポート、指導教官との討論等を通して評価を行う。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <p><座学 (選択科目)>がんゲノム医療イントロダクション、ゲノム・遺伝子・DNAの基礎、ゲノム解析の方法、シークエンスデータの解析方法、がん遺伝子パネル検査、がんゲノム医療の臨床的有用性講義、シグナル経路総論講義、シグナル経路①RTK (EGFR, HER2, HER3, HER4)、シグナル経路②RTK (ALK, ROS1, RET)、シグナル経路③RTK (FGFR, KIT/PDGFR, MET/VEGFR)、シグナル経路④PI3K経路、シグナル経路⑤MAPK経路、シグナル経路⑥WNT, NOTCH, HEDGEHOG経路、シグナル経路⑦Cell cycle, TP53、シグナル経路⑧DNA修復、MSI、LOH、シグナル経路⑩Epigenomics、シグナル経路⑪Metabolic pathway講義、二次的所見と遺伝性疾患、C-CATへのデータ共有と利活用、検体の品質管理講義、Pharmacogenomics</p> <p><演習 (選択科目)>エキスパートパネル、次世代シーケンサー、看護師ケース・メソッド</p> <p><セミナー/シンポジウム>一線級の専門家による創薬や全ゲノム解析等に関するセミナー/シンポジウム</p> | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 腫瘍内科専門医 (日本臨床腫瘍学会)、分子病理専門医 (日本病理学会)、遺伝性腫瘍専門医 (日本遺伝性腫瘍学会) の研修施設として認定。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等 (新規性・独創性等) | 本コースは、がん個別化医療の初学者が、基礎から最先端の応用まで一気通貫で学ぶ事ができ、また多職種との連携も学ぶ事ができるのが特色である。また、座学のみならず、実習・演習を通し高い応用力の養成を目指す。 | | | | | | |
| 指導体制 | 連携校の各領域 (臨床腫瘍学、がんゲノム、病理学、臨床遺伝学、看護学、薬学など) のエキスパートが合同でコースの座学、実習、演習を担当する。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | <p>【がん個別化医療に携わる医療人】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各施設にて、がん個別化医療に精通した医療者として活躍 <p>【想定される専門職】</p> <p>がん薬物療法専門医、臨床遺伝専門医/遺伝性腫瘍専門医、遺伝専門看護師、遺伝性腫瘍コーディネーターまたは家族性腫瘍カウンセラー、がんゲノム医療コーディネーター、創薬の専門家 (製薬メーカー等)、 바이오インフォマティクス専門家等</p> | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和5年9月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 15 | 30 | 30 | 30 | 30 | 30 | 165 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | がんゲノム医療中核拠点病院慶應義塾大学と拠点病院東京医科歯科大学の連携病院が計19ある。本事業の連携校7校に6病院あり、計25施設となる。これらの病院へのスタッフ6名ずつの配置を目標とし、165名養成する必要がある。過去のインテンシブコース志願者数および事前の希望調査も考慮し、目標人数を165人と設定。 | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | |
|----------------|---|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通：がんゲノム、遺伝子細胞療法や免疫療法などの先端医療技術、およびビッグデータ、AIを駆使したがん創薬コース |
| 対象職種・分野 | がん創薬にかかわるすべての研究者、がん医療に携わるすべての医療者（薬剤師、看護師、医師、歯科医師、技師等） |
| 修業年限（期間） | 1年 |
| 養成すべき人材像 | ①がん治療薬や診断薬開発に必要な薬理学的知識を有し、基礎研究から実用化までの過程の概略を理解して説明できる人材 ②遺伝子細胞療法や免疫療法など新規医療技術を理解し、基礎研究開発もしくは臨床応用においてその知識を活用できる人材 ③AIやビッグデータなどを駆使し創薬研究への活用を出来る人材 |
| 修了要件・履修方法 | 所定の講義・演習を履修し、試験もしくはレポート等により合格すること。 |
| 履修科目等 | 以下の内容の講義を実施する。間、非同期型の講義聴講を中心とし、PBL型の集合討論、演習も実施する ① がん創薬のための薬理学 1) 悪性腫瘍の病態・薬物治療の概要 2) 医薬品開発におけるDDS研究の役割 3) 創薬と臨床における薬物動態研究の意義と役割 ② がんゲノム医療、遺伝子細胞療法や免疫療法など新規医療技術 1) がんゲノム医療総論 2) がん免疫療法、探索的臨床試験について 3) CAR-T療法の臨床 4) CAR-T療法の発明から臨床応用まで 5) マルチオミックス解析による治療・診断標的の探索 6) 今後のがん免疫細胞療法開発（ゲノム編集、iPS細胞など新規技術の融合） ③ AIやビッグデータなどを駆使した創薬研究 1) 医療データ科学が拓く世界 2) 臨床研究におけるビッグデータ解析 3) NGSデータ解析・基礎 4) 遺伝子発現データと機械学習 5) AIによるがん病理組織の画像解析 6) AIを利用したインシリコ創薬 ④ レギュラトリーサイエンス、トランスレーショナルリサーチ 1) 医薬品の開発から承認までのプロセス 2) 医療関連法規と医の倫理 ⑤ グループディスカッション・グループワーク (1コマ) 1) がん治療薬開発を想定したシミュレーション演習 |
| がんに関する専門資格との連携 | がん専門薬剤師（日本医療薬学会）、外来がん治療認定薬剤師（日本臨床腫瘍薬学会）の研修単位は研修趣旨に合致するものは単位発行を申請する。 |

| | | | | | | | |
|--|--|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|--------------------|----------------|
| 教育内容の特色等 (新規性・独創性等) | <p>がん治療は、がん種や病態によって多様であるとともに、治癒率が上がったがんであっても、既存の薬剤や治療法だけでは治療できない場合も少なからずあり、基礎および臨床試験を通じて新薬や新規技術を開発することが依然重要である。がんゲノム医療やCAR-T療法、チェックポイントインヒビターなど近年のがん医療の発展は目覚ましく、その開発には薬学にとどまらず細胞生物学からビッグデータやAIを用いたインシリコ創薬などデータサイエンスまで幅広い知識の統合が重要となる。競争の激しいがん創薬分野において、世界に先んずるためにも幅広い分野において高い知識を有するとともに今後新たに出現する新しいモダリティをも積極的に取り入れて、それらを統合することが出来る人材の育成が求められている。</p> <p>本コースではがん治療薬や治療技術、診断薬や診断技術に関する基本的知識、創薬に関連する臨床研究や法規制について順次学び、これらの知識に基づいてビッグデータやAI、遺伝子療法、細胞療法、がんゲノム医療など最先端の医療技術開発に寄与できる幅広い知識を持った人材を育成する。東京薬科大学におけるがん創薬に関する薬理学コース、慶應義塾大学および本学におけるビッグデータ・AIに関する医療データ科学コース、当該医療を実践している慶應義塾大学、順天堂大学、本学の臨床講義を共有し、さらにはがん先端医療技術特有の問題や特徴を踏まえた統括的講義と議論を追加する。</p> <p>本コースは最先端のがん医療の研究・臨床を実践している大学と幅広い医療職を養成している大学の連携によって計画されており、各大学のエキスパートによる講義・実習を幅広い医療専門職を有する受講者に提供することで、それぞれの立場でがん創薬や治療へ寄与できる人材の育成を目的としている。その具体的な方法として、グループディスカッションやグループワークを取り入れて、チームとして開発やミッション達成を目標化できることを目指す。</p> | | | | | | |
| 指導体制 | <p>東京医科歯科大学および連携大学の薬学、分子生物学、統計学、データサイエンス、レギュラトリーサイエンスなど基礎からトランスレーショナルリサーチまで創薬に関する幅広い分野の専門家による講義・実習を行う。</p> | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | <ul style="list-style-type: none"> ・ AIやビッグデータなどデータサイエンスを用いた創薬研究者 ・ 分子標的薬やコンパニオン診断薬などの開発を行う基礎研究者 ・ CAR-Tなど細胞療法、遺伝子治療、免疫療法など新規医療技術開発に携わる基礎研究者 ・ がん専門医療機関など専門機関における、新規医療技術を用いた臨床研究に従事する医療者および臨床研究支援者（プロジェクトマネージャー、スタディマネージャー、データマネージャー、臨床研究コーディネーター等） | | | | | | |
| 受入開始時期 | <p>令和6年4月</p> | | | | | | |
| 受入目標人数 <small>※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 <small>※新規に設置したコースに限る。</small> </small> | R5年度 0 | R6年度 10 | R7年度 15 | R8年度 15 | R9年度 15 | R10年度 15 | 計 70 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | <p>各施設の希望調査に基づき、初年度10名、次年度以降15名/年を目標とする。</p> | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | |
|----------------|--|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通：先端医療技術を用いた個別化医療、レギュラトリーサイエンスを駆使し難治性がん克服戦略を立案し推進できる医療人養成コース(インテンシブコース) |
| 対象職種・分野 | がん創薬にかかわるすべての研究者、がん医療に携わるすべての医療者(薬剤師、看護師、医師、歯科医師、技師等) |
| 修業年限(期間) | 1年 |
| 養成すべき人材像 | ①医薬品開発に必要な基礎的な薬理学を理解し説明できる人材。 ②がん治療薬や診断薬の基本的知識を有し、基礎研究から実用化までの過程の概略を理解して説明できる人材 ③がん治療薬や診断薬の臨床試験の策定と実施のための調整ができる人材 ④薬事に関する理解と知識を有し、難治性がんの治療戦略について様々な法制度と倫理的規範に則った調整や提案ができる人材 ⑤遺伝子細胞療法や免疫療法など新規医療技術を理解し、臨床応用においてその知識を活用できる人材 |
| 修了要件・履修方法 | 所定の講義・演習を履修し、試験もしくはレポート等により合格すること。 |
| 履修科目等 | 以下の内容の講義を実施する。非同期型の講義聴講を中心とし、PBL型の集合討論、演習も実施する ① がん創薬のための薬理学 1) 医薬品開発におけるDDS研究の役割 2) 創薬と臨床における薬物動態研究の意義と役割 3) 悪性腫瘍の病態・薬物治療の概要 4) 薬剤評価学 5) 医薬品の効果・副作用に関わる薬物動態学・薬力学的評価法 6) 医薬品候補化合物の最適化 ② がんゲノム医療、遺伝子細胞療法や免疫療法など新規医療技術 1) がんゲノム医療総論 2) がん免疫療法、探索的臨床試験について 3) CAR-T療法の臨床 ③ AIやビッグデータなどを駆使した創薬研究 1) 医療データ科学が拓く世界 2) 臨床研究におけるビッグデータ解析 ④ レギュラトリーサイエンス、トランスレーショナルリサーチ 1) 医薬品の開発から承認までのプロセス 2) 医療関連法規と医の倫理 3) 治験の意義と仕組み 4) 臨床研究デザインの概要・臨床試験のエンドポイントの考え方・設定法 5) がんに対する新規治療法開発のためのトランスレーショナル研究 6) 疫学・統計と医療データ分析 ⑤ グループディスカッション・グループワーク (1コマ) 1) 希少・難治がん患者への治療アクセスのための手段、法規制に関する討論 |
| がんに関する専門資格との連携 | がん専門薬剤師(日本医療薬学会)、外来がん治療認定薬剤師(日本臨床腫瘍薬学会)の研修単位は研修趣旨に合致するものは単位発行を申請する。 |

| | | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|-------|----|--|
| <p>教育内容の特色等 (新規性・独創性等)</p> | <p>がん治療は、がん種や病態によって多様であるとともに、治癒率が上がったがんであっても、既存の薬剤や治療法だけでは治療できない場合も少なからずあり、基礎研究および臨床試験を通じての新薬や新規技術を開発することが依然重要である。難治性と判断された患者に対しては、臨床試験への参加が治療法アクセスの一案であるが、それだけでは取り残される患者も少なくない。日本で薬事承認外であっても、薬剤自体が入手できる場合もあり、それらを合法的かつ安全性を担保して使用するためには、関連する法規制の十分な理解が必要となる。また、研究者自らが臨床試験を企画し実施することも必要となる場合もあるが、研究者単独でそれらを進めることは不可能であり、長期的かつ俯瞰的視野を併せ持った支援者の存在が必要である。</p> <p>一方、がんゲノム医療やCAR-T療法、チェックポイントインヒビターなど近年のがん医療の発展は目覚ましく、新規医療技術の臨床応用に関わる医療者には専門的な知識が求められている。</p> <p>本コースではがん治療薬や治療技術、診断薬や診断技術に関する基本的知識を踏まえた上で、臨床試験や臨床研究の立案、計画支援、実施調整、関連する法規制について順次学び、これらの知識に基づいて創薬ないしレギュラトリーサイエンスを駆使して個々の患者の治療戦略も構築できる人材を育成する。</p> <p>臨床研究計画作成にあたっては、臨床統計学の理解や活用が必要であり、レギュラトリーサイエンスに関しては医療開発のプロセスや知財管理が必要となることから、当該問題を取り上げている東京薬科大学、本学総合統計学コースと医療政策管理学コース（MMAコース）の科目を転用し、さらにはがん特有の問題や特徴を踏まえた統括的講義と議論を追加する。</p> <p>本コースは最先端のがん医療の研究・臨床を実践している大学と幅広い医療職を養成している大学の連携によって計画されており、各大学のエキスパートによる講義・実習を幅広い医療専門職を有する受講者に提供することで、それぞれの立場でがん創薬や治療へ寄与できる人材の育成を目的としている。その具体的な方法として、グループディスカッションやグループワークを取り入れて、チームとして開発やミッション達成を目標化できることを目指す。</p> | | | | | | | |
| <p>指導体制</p> | <p>東京医科歯科大学および連携大学の薬学、分子生物学、統計学、データサイエンス、レギュラトリーサイエンスなど基礎からトランスレーショナルリサーチまで創薬に関する幅広い分野の専門家による講義・実習を行う。</p> | | | | | | | |
| <p>修了者の進路・ キャリアパス</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ CAR-Tなど細胞療法、遺伝子治療、免疫療法など新規医療技術開発に携わる基礎研究者 ・ がん専門医療機関など専門機関における、新規医療技術を用いた臨床研究に従事する医療者および臨床研究支援者（プロジェクトマネージャー、スタディマネージャー、データマネージャー、臨床研究コーディネーター等） | | | | | | | |
| <p>受入開始時期</p> | <p>令和6年4月</p> | | | | | | | |
| <p>受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。</p> | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 | |
| | 0 | 10 | 15 | 15 | 15 | 15 | 70 | |
| <p>受入目標人数設定の考え方・根拠</p> | <p>各施設の希望調査に基づき、初年度10名、次年度以降15名/年を目標とする。</p> | | | | | | | |

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|----|
| 大学名等 | 東京医科歯科大学拠点連携校共通 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 連携7校共通：CAR-T療法・ICIに特化した専門薬剤師養成コース（インテンシブ） | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 薬剤師 | | | | | | |
| 修業年限（期間） | 1年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | ①がん薬物療法の中でも製剤の管理や調製、さらには副作用対策において特異的な知識や技術が要求されるCAR-T療法や免疫チェックポイント阻害薬(ICI)について、最新の知見を踏まえたpharmaceutical careを実践できる薬剤師 ②CAR-T療法・ICIに特化した職種間連携体制を構築でき、チーム医療が実践できる薬剤師 ③職種横断的な部門の構成員として、CAR-T療法・ICI療法を俯瞰しマネジメントを行うことができる薬剤師 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 規定の12の講義および実習を履修し、試験に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | <ul style="list-style-type: none"> ・CAR-T療法・ICIに特化した12の講義（がん免疫、細胞・免疫療法、治療の実際、有害事象の管理、新規薬剤開発など） ・演習・実習では他のWGのCAR-T療法、ICIの実習にも参加し、多職種連携について学び、習得する。 | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 日本医療薬学会に対し「がんに関する講習会・教育セミナー」に認定されるよう申請し、がん専門薬剤師単位認定に必要なクレジット発行の資格を得る予定。 | | | | | | |
| 教育内容の特色等（新規性・独創性等） | CAR-T療法およびICIは限られた医療機関で実施されている治療法であるため、薬剤師WGメンバーが所属する大学病院の本治療法に精通している医師、薬剤師、看護師が主たる講師を務める。そのため本コースを受講する薬剤師は、がん領域における高度な臨床知識を有し、極めて専門性の高い領域での薬物療法に精通した人材を目指して養成される。実習・演習においては医師、看護師など多職種との連携を現場で学び、習得するため、知識だけでなくチーム医療を実践できる薬剤師を養成できる。さらに本コースを修了した薬剤師が、CAR-T療法・ICIの適正使用情報を普及させるため臨床現場で後進の指導を行い、入院・導入から外来加療・フォローアップまでのシームレスな薬物療法を担える薬剤師がさらに養成される指導体制の構築が期待できる。 | | | | | | |
| 指導体制 | 連携校全体およびその附属病院・関連病院の細胞療法、がん免疫、再生医療分野に精通した医学・薬学の基礎系および臨床系の専門家が直接の指導を行う。実習・演習では診療現場でこれらの治療に携わる医師、看護師等が指導にあたる。 | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | がん専門薬剤師、がん薬物療法認定薬剤師などの専門資格を取得し、大学病院、地域の中核病院、がん拠点病院にて多職種と連携して、CAR-T療法やICIを受ける患者に最適なケアが提供できる専門の薬剤師。 大学やがんプロのコースにおいて後進の指導を行う教員職。 | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 50 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 連携7校およびその附属病院の薬剤師の事前調査により10名以上の受講者が想定されるため、受入れ目標人数を年10名と設定した。 | | | | | | |

次世代がん医療を担う多職種人材養成プラン (申請校：東京医科歯科大学)

<首都圏7大学連携>

慶應義塾大学

順天堂大学

東京歯科大学

東京医科歯科大学

東京薬科大学

東海大学

国際医療福祉大学

本事業の特色

「がん患者を誰一人取り残さない！」

- ・ 14のWorking group (WG)
- ・ 多くの連携校共通コース
- ・ 多職種連携の指導
- ・ データサイエンスの教育
- ・ 患者団体との密な連携

①～③の課題解決のため参加校と全校専門家が集結したWGが連携

①現場で顕在化している課題

- ・ 痛みの治療とケア
- ・ 放射線治療医・病理診断医
- ・ がん学際領域・がん薬物療法
 - ・ 造血器腫瘍
- ・ 小児がん、稀少がん
- ・ 口腔がん、がん口腔支持療法

②がん予防の推進

- ・ 医療ビッグデータと
予防医療
- ・ 遺伝の専門家
- ・ がんサバイバーのケア

③新たな治療法の開発

- ・ 個別化医療
- ・ 新薬開発、創薬研究
- ・ CAR-T療法等の
専門薬剤師

多職種専門的
医療人の輩出

継続可能な
教育システムの構築

がん医療の
均てん化と質の向上